

平成 23 年度国土政策関係研究支援事業 研究成果報告書

被害が甚大で集団移転事業を実施する  
小規模自治体における  
未来を担う若い世代の復興計画への  
参画手法に関する研究

公益財団法人ひょうご 21 世紀研究機構

石川永子

<共同研究者>

長岡造形大学 澤田雅浩

和歌山大学 照本清峰



# 目 次

I. 研究目的・意義	1
II. 研究手法	2
III. 成果内容	4
○ 要旨	4
○ キーワード	8
○ 本編	9
1. 東日本大震災の復興まちづくりの課題と計画の策定・実行プロセス	9
1-1. 東日本大震災の被害と災害対応の特徴	
1-2. 東日本大震災の復興の取組みと課題	
1-3. 南三陸町における復興計画の策定と計画の実施に向けての取組み	
1-4. 東日本大震災の被災地の人口動態をめぐる実態と課題	
1-5. 小括	
2. 災害後の若い世代の生活環境との復興まちづくりへの参画の機会	21
2-1. 被災後の中学校の状況 中学生のおかれた環境	
2-2. 東日本大震災の復興における若い世代の取組み事例	
2-3. 小括	
3. 事例1 被災市街地内の中学校での実践と分析	24
3-1. 教員への研修（心のケアなど復興を考える前の段階での検討）	
3-2. 生徒への研修（被災時に10代だった神戸の被災者との交流）	
3-3. 小括	
4. 事例2 広域避難・仮設校舎の中学校での実践と分析	28
4-1. 戸倉中学校での復興まちづくり授業の概要	
4-2. 各回の内容	
4-3. 中学校の総合学習プログラムとしての意義	
4-4. 小括	
5. 東日本大震災の復興過程における実践研究をもとにした考察	65
5-1. 2事例の考察まとめ（地域の事情に合わせた中長期的な展開に向けて）	

5-2. 広域災害における若い世代の復興への参加の可能性

5-3. 小括

6. 本研究の他地域への応用1（災害後の復興過程における展開）・・・68

6-1. 東日本大震災の他地域への応用の可能性

6-2. 若い世代の復興まちづくり検討プログラムの構築に向けて

6-3. 小括

7. 本研究の他地域への応用2（事前復興まちづくり活動への展開）・・・70

7-1. 事前復興まちづくり検討プログラムの現状

7-2. 東南海・南海地震等の発生が予想される地域での事前復興プログラムへの応用の可能性

7-3. 小括

○ 資料編・・・・・・・・・・・・・・73

資1. 志津川中学校 教員研修会資料

資2. 志津川中学校 全校生徒研修会資料

資3. 戸倉中学校 全校復興ワークショップ グループワーク成果

資4. 戸倉中学校 第2回授業 説明資料

資5. 戸倉中学校 第2回授業 ワークシート

資6. 戸倉中学校 新潟訪問 ワークシート

資7. 最終報告会発表資料

本研究においては、研究代表者・共同研究者に加えて、薬袋奈美子（日本女子大学）、定池祐季（北海道大学）、石塚直樹、筑波匡介、樋口勲（中越防災安全推進機構）、村上大和（三菱総合研究所）の6名の専門家が参画した。

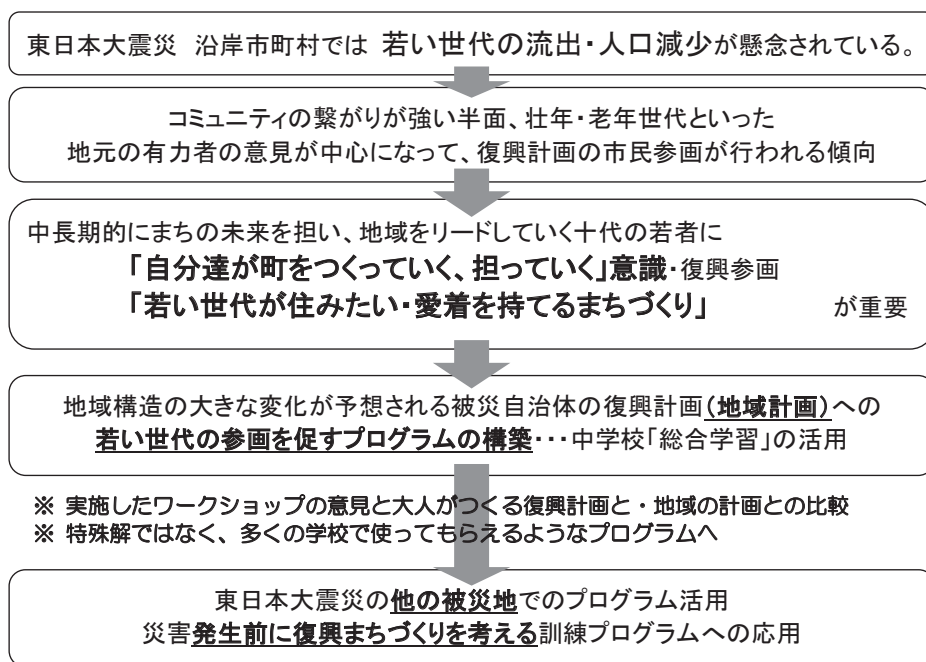
また、南三陸町役場、南三陸町立志津川中学校、南三陸町立戸倉中学校、神戸市消防局、財団法人山の暮らし再生機構のご協力を賜った。

## I. 研究目的・意義

東日本大震災の被災地、特に、被害が甚大で集団移転事業を実施することが検討されているような、太平洋沿岸部小規模自治体では、若い世代の世帯の自治体外への流出しが懸念されている。また、集落や小規模な市街地はコミュニティの繋がりが強い半面、復興を考える際、壮年・老年世代といった地元の有力者の意見が中心になって、復興計画の市民参画が行われる傾向がある。

復興には10年以上の年月という、中長期的な時間がかかる。10年後にまちの未来を担い、地域をリードしていく存在として期待される中学生や高校生が、「自分達が町をつくっていく、担っていく」という意識でまちの復興に参画することが重要であると考えられる。そのため、参画のデザインを実践研究を通して考察し、手法を構築していくことが目的である。

特に、未曾有の津波により、中学生・高校生の心の傷も深く、また、震災前の土地では再建できない可能性もあり、教育の現場では、いきなり復興のデザインを考えるというよりも、まずは、「同じ世代のときに災害を経験して、いままでの人生を歩んできた、阪神・淡路大震災や北海道南西沖地震や新潟県中越地震の被災者等との交流を通じた心のケアや今まで継続してきた防災教育プログラムを振り返るといったプロセスを通して、徐々に町の復興を具体的に考え・提案する、といったプログラムにすることが肝要である。



図表 1 本研究の背景と目的

本研究は、このように、災害から1年間の期間で、集団移転を含めた地域構造の変化を伴うような復興における、若い世代の復興計画のデザインの参加・実際の計画（自治体の復興計画・各地区の復興計画）への反映までの手法を実践を通して構築することを目的とする。

この研究計画は、単なる防災教育の領域を超えて、特に地域構造の大きな変化が予想される被災自治体の復興計画への、若い世代の参画を促すプログラムの構築と、実践を通じた実効性およびその多様な効果の検証を目的としている。

## II. 研究手法

本研究では、まず、東日本大震災の被害および対応の特徴と、復興の課題、特に集団的に移転が必要な地域の復興の課題について、研究代表者が復興の計画策定支援を行っている宮城県南三陸町を中心に整理する。また、被災後、十代の若者がおかれている状況について、学校生活や住環境などの面からまとめ、被災後の復興計画における若い世代の参画手法を考えるための実践研究で重要な論点を整理する。

実践研究は南三陸町の町立中学校を対象として行った。具体的には、①同町立志津川中学校（町内の被災市街地を見下ろす高台に立地）と、②同町立戸倉中学校（校舎が被災し、隣接する内陸部の登米市の旧善王寺小学校の校舎で授業を継続）で実施した。

上記の2校は、被災後の校舎の立地条件や生徒の居住地域等が異なり、復興まちづくりに関する取組みの方針も異なったため、それぞれ別の方法を取りながら、総合学習の授業として、本研究の授業を実施した。

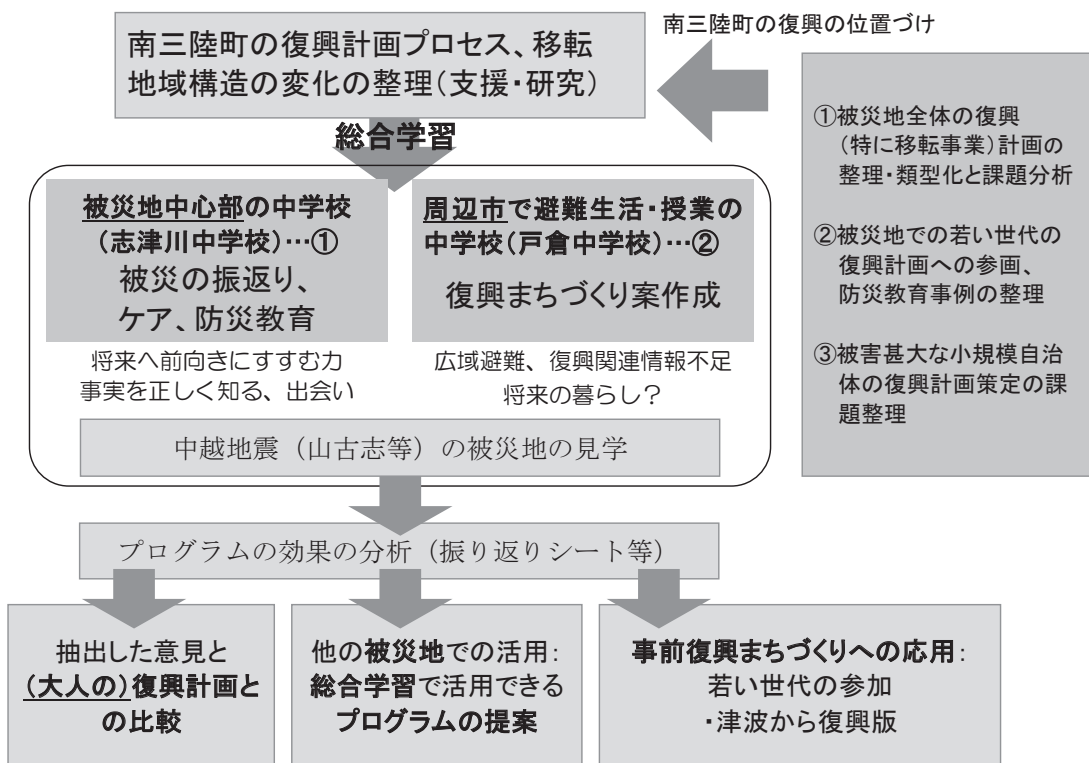
被災市街地内の校舎で授業を継続している志津川中学校では、復興まちづくりの前段階として、震災から半年を振り返り心のケアを強く意識した活動や災害後の防災教育に関するカリキュラムを行うこととなった。本研究では、同校教員がカリキュラムを組む以前の支援として、十代で被災し防災分野で活躍する専門家等による全教員を対象とした研修および全校生徒を対象とした研修を行うこととした。

一方で、校舎が被災し、1年間にわたり小中学校を臨時校舎として隣接市の廃校を利用することになった戸倉中学校では、生徒の約半数が町を離れて仮住まいをしていることもあり、被災者支援や復興まちづくりに関する情報がどうしても届きにくくなり、積極的に復興まちづくりについて考えていきたいという同校の方針にあわせ、過去の被災地の復興事例の学習や新潟県中越地震の被災地の視察を通して、中長期的な復興のイメージを持つとともに、自分のこれからの10年とまちの復興の10年を重ね合わせて、復興を考えていく取組みを行った。

これらの取組みを通して、若い世代が持っている復興まちづくりのアイデアを引き出していくプログラムの構築や、多くの生徒が高校卒業後に町を（一旦は）出て行ってしまふ現実を踏まえ、どのように町の復興と関わっていけるのかを考えるプログラムの

構築を目指した。

最後に、これらの実践研究をふまえ、東日本大震災等の被災後の若い世代を対象とした復興まちづくりのプログラムの提案と、近い将来、発生することが予想されている広域災害や集落移転の検討が予想される、東南海・南海地震や首都直下地震の地域の行政職員や住民（自治会等）が、災害前から復興まちづくりについて検討したり災害が発生したときに計画を検討することができる力を養うための訓練（事前復興まちづくり訓練）を若い世代でも実施できるプログラムとするための提案を行うこととする。



図表2 本研究のフロー

### Ⅲ. 成果内容

#### ○要旨

東日本大震災の被災地、特に、被害が甚大で集団移転事業を実施することが検討されているような、太平洋沿岸部小規模自治体では、若い世代の世帯の自治体外への流出が懸念されている。また、集落や小規模な市街地はコミュニティの繋がりが強い半面、復興を考える際、壮年・老年世代といった地元の有力者の意見が中心になって、復興計画の市民参画が行われる傾向がある。復興には10年以上の年月という、中長期的な時間がかかる。10年後にまちの未来を担い、地域をリードしていく存在として期待される中学生や高校生が、「自分達が町をつくっていく、担っていく」という意識でまちの復興に参画することが重要である。本研究は、災害から1年間の期間で、集団移転を含めた地域構造の変化を伴うような復興における、若い世代の復興計画のデザインの参加・実際の計画（自治体の復興計画・各地区の復興計画）への反映までの手法を実践を通して構築することを目的し、実践研究を行った宮城県南三陸町の志津川中学校（被災市街地の中に立地）と戸倉中学校（校舎が被災し隣接する市町村の廃校を利用して授業を継続）での活動をもとに分析考察を行ったものである。

第一章では、東日本大震災における復興まちづくり計画の策定・実行プロセスについて整理し、その課題を指摘した。第二章では、災害後の若い世代の生活環境との復興まちづくりへの参画についてまとめた。第三章、第四章では、実践研究を行った宮城県南三陸町の志津川中学校（被災市街地の中に立地）と戸倉中学校（校舎が被災し隣接する市町村の廃校を利用して授業を継続）での活動について記録、分析した。

第五章では、第四章までの内容をもとに、東日本大震災の復興過程における若い世代の復興まちづくりへの参加手法のデザインについて考察した。第六章、第七章では、第五章までの内容をもとに、本研究の成果を他地域に活かすためのプログラムについて検討した。第六章では災害後の復興過程における展開のしかたについて、第七章では、事前復興まちづくり活動への展開について検討し、南三陸町の実践研究を通して得た知見を、他地域や他災害に活かしていくことを試みた。

第一章では、東日本大震災における復興まちづくり計画の策定・実行プロセスをまとめ、特に、若い世代に関係するような復興の課題について整理した。

東日本大震災では、岩手・宮城・福島の沿岸部が津波により甚大な被害を受け、大規模な広域避難（避難所を被災市町村外に設置）が実施されたり、宮城県では応急仮設住宅数を上回った県借上げ仮設住宅（空き家を県が借り上げて被災者が居住する）に居住するために、賃貸ストックの多い近隣の都市部へ被災者が移動したりしたために、震災発生から仮住まいの時期に、被災地全体での人口移動の現象がおきた。

一般的に、「災害は地域の変化を加速させ、潜在する地域の課題を顕在化させる」と



いわれているが、東日本大震災においては、個別の引っ越し以外にも、公的な住宅支援制度の利用に伴う、被災者の沿岸部から内陸部への、集落部から周辺の都市部への移動があった。この人口移動は、仮住まい期だけの現象にとどまらず、復興まちづくりが進み、本設の住宅が建設される過程においても、少なからぬ世帯が、震災前の市町村に戻らず、沿岸被災市町村では人口減少の傾向に拍車がかかることが懸念される。このような世帯ごとの、車社会の生活圏をもとにした人口移動とは別に、高校卒業後等に、故郷を離れて就職や進学のために転居する人も多い若い世代が、これからの自分自身の将来をどのように考え、また育った地域の復興にどのように関わっていくかは重要な課題である。一方で、わが国有数の漁場である三陸の海は、地元でも「豊穡の海」と言われており、比較的次世代の人材も豊富でわが国の漁村の高齢化率に比べると低い地域も存在する。

復興計画は、国の予算措置の時期、すなわち、平成 23 年度第三次補正予算の決定の時期より早く議論されており、市街地も含めた地域の復興の具体的な絵が見えてきたのは、平成 23 年度後半以降であり、特に集団移転も含めた各集落の復興の具体的な内容（移転地の場所や、移転先の集落配置、震災前居住地の利用方法等）は、市町村の復興計画が策定されてから、ようやく検討が本格化したところである。海岸沿いから高台への移転は、すなわち、生活上は条件不利地に移転することを意味する。このような復興計画には、どんなことが必要なのか。ひとは安全という要素だけでは、たとえ高台に移転したとしても、漁業をはじめ産業が再開され、豊かなで充実した暮らしができなければ住み続けることは難しい。本研究では、南三陸町の復興計画の策定の議論がひと段落した後、事業化に向けて検討がはじまっている状況のなか、中学生と共に、「自分と町の未来」について考えるプログラムを構築することとした。

第二章では、災害後の若い世代の生活環境との復興まちづくりへの参画についてまとめた。被災市街地の高台に立地し津波による被害を免れた学校では、校舎を避難所としたため、住民だけでなく多様な支援者による活動が行われた。

未曾有の津波により、中学生の心の傷も深く、生徒を指導する教員にも、生徒への接し方や防災教育、復興に向けてどのように進んでいけばよいのかといったことを伝えるのに、迷い葛藤があるとのことであった。

一方で、内陸部の避難所や応急仮設住宅、県借上げ住宅に住む生徒が多い学校では、町からの情報がどうしても少なくなってしまうために、正しい情報を知り、かつ、今一度、自分が育った地域の復興について考える機会が必要であると感じた。

東日本大震災以後、未成年者を対象として、復興まちづくりの提案などの取組みが行われたものとしては、こども環境学会による「東日本大震災こども支援プロジェクト」の一環として、復興プラン提案競技が行われるなど、こどもの生活環境から復興を考える取組みがなされている。しかし、総合学習の授業として、全員が議論しながら復興を

考えるプログラムが行われている事例は少ないのではないかと推測される。

第三章、第四章では、実践研究を行った宮城県南三陸町の志津川中学校（被災市街地の中に立地）と戸倉中学校（校舎が被災し隣接する市町村の廃校を利用して授業を継続）での活動について記録、分析した。

志津川中学校では、震災前から防災教育に熱心に取り組んでいた。当初、過去の災害の体験者による講話等だけではなく、本研究の中で、復興まちづくりの検討についても総合学習で行う予定であったが、まだ、復興について考えられるような状況でない生徒もいるということから、教員や全校生徒への研修を通して、学校が行う総合学習（震災半年を振り返りながら防災についても学ぶ）のカリキュラム作成を行う際の支援を行った。本研究の関与は限定的ではあるが、甚大な被害を受けて避難所となった中学校における総合学習の内容について必要な視点を整理することができた。また、これらの活動について、防災甲子園に応募したところ、「東日本大震災被災地特別賞」を受賞し、授賞式のために神戸を訪問した際、まち歩きや復興に関わった方々の話を聞いて、より具体的に復興のイメージが描けるようになったという意味で、過去に被災して復興した被災地に若い世代が訪問して、実際にみるということがいかに有効であるかが、改めて明らかになった。

一方、戸倉中学校では、被災した地域から離れた地の校舎で毎日の学習を継続し、震災後は町外に居住する生徒が多いので、逆に、学校側が、生徒達に対して、自らの町の現状を伝え、地域の復興を考える機会を持ちたいと考えていたことから、震災半年後から、復興まちづくりに関する総合学習の授業を本研究で担当することとなった。

当初の計画では、本研究の目的として、若い世代が自らの町の復興に関心を持ち、まちづくりの提案をすることによって、「人口流出をとめる」「若い世代が主体性を持ってまちの復興に寄与する」ためのプログラムの構築を目指そうと考えた。しかし、現実には、そのような、やや短絡的で単純なものではなく、若い世代の各人の将来のビジョンを考えるなかで、「生まれ育った地域の外に暮らしたとしても、自らの故郷の復興に向けて出来ることは何か」を具体化していくことが重要と考えられた。

「町内に住む」「町外に住む」という区別は、行政の市町村の範囲内で人の移動を考えているからである。もちろん、町内、地域内に留まって復興まちづくりに参画する人材を育てることも重要だ。しかし、それに加えて、実際には、車を利用した生活圏での移転や、若い世代が羽ばたいていく大都市圏への移転など、被災地全体として、若い世代の復興まちづくりへの関心を高め、地域とのつながりを持って生きていくことを考えていくことも、積極的に検討していくことが、より実態に近く、効果的、建設的ではないかとの結論に達した。

実際のプログラムでは、第一回目は、過去の災害の復興の事例などの学習をしないで、

町の復興について、生徒が素直に思ったとおりの議論をすることにした。回数を重ねていくなかで、事例学習や視察を通じて、生徒のグループワークの議論にどのような広がりがあるかを考察した。

実施してみると、まちの復興イメージについて、10年後も町に留まると答えた生徒が、「人々の深い絆や温かさはそのままが良いが、便利で若い世代が必要とする店舗などの商業施設等が必要」と考える傾向が強いのに対し、10年後には町を出ていこうと答えた生徒は「震災前と変わらない、そのままのまちがいい」と答える傾向が強かった。

また、「地域にとどまることができること」「地域外からかかわれること」について、カードゲームを用いて議論を行った。結果として、若い世代には、「地域への愛着」と「地域から外にでて頑張りたい」という複雑な気持ちや、家族（親、兄弟）の自分への期待との葛藤があることが明らかになった。こういった、現実の、若い世代の考えを引き出しながら、柔軟に、復興への関わり方を自らで探っていくようなプログラムの構築が必要であると考えられる。また、新潟県中越地震の集落移転の視察や関係者との交流による復興プロセスに関する学習を通して、より、自らの町の復興に重要なテーマのイメージに広がりが出る効果があった。

第五章では、第四章までの内容をもとに、東日本大震災の復興過程における若い世代の復興まちづくりへの参加手法のデザインについて考察した。

重要な論点として、①親世代の移動圏域と十代の移動圏域の違い、②地域外に暮らす若い世代の地域との無理のない持続的なつながり、復興に関する活動への参加の仕組みづくり、③若い世代の、家族・土地への愛着と、自らの将来を考える間での葛藤について議論する機会づくり、④大人の理想像にとらわれない自由な発想を活かしつつ、事例や議論を重ねていくことで、議論が深まるプロセスデザイン、⑤復興の多様性を知ることの重要性、⑥復興の議論が「将来に向かって前にすすんでいく力になる」と広義の心のケアの効果がある、を指摘した。

第六章、第七章では、第五章までの内容をもとに、本研究の成果を他地域に活かすためのプログラムについて検討した。第六章では災害後の復興過程における展開のしかたについて、第七章では、事前復興まちづくり活動への展開について検討し、南三陸町の実践研究を通して得た知見を、他地域や他災害に活かしていくことを試みた。

東日本大震災や、今後発生する災害後の復興過程における展開のしかたについて検討した。「復興まちづくり版」「被災から現在までをふりかえる版」「これからの将来を考える版」などの基本形に加えて、地域性に合わせたオプションのプログラムなど、可変性のあるものをつくり、教育現場や地域のニーズにあわせて、教員や支援者がアレンジ

する形が利用しやすいのではないかと考えられる。

また、神戸や中越などの災害対応の振り返りを行う防災ゲームや、復興プロセスにおける市民参画のさまざまな蓄積を活用することが、プログラムの充実につながると考えられる。特に、クロスロードゲームなど、復興に関する、なんとなく発言しにくい意見を、ロールプレイの手法を使っておこなうことで、なかなか面と向かって議論にくい話題であっても、向き合いやすくする効果がある。

最後に、本研究の事前復興まちづくり活動への展開の可能性についてまとめた。現在、東京都等で実施されている「事前復興まちづくり訓練」は、災害が起きる前に、町の復興計画を考えておく力を育てる訓練を行うプログラムとなっており、行政職員用と市民用がある。ただし、市民用も実際の参加者は、自治会の役員など、高齢者が多く、より多様な世代が参加するための工夫が課題となっていた。

今回の実践研究で重要となった視点や、活発な議論ができた手法を、既存の事前復興まちづくり訓練に織り込みながら、若い世代が参加するプログラムに再構築することが重要である。これからの担う若い世代の意見には、多くの町の人にも刺激をうけ、まちづくり訓練の議論も活性化されることが予想される。また、東日本大震災の被災市町村と、同じく広域津波被害が予想される東南海・南海地震の被災市町村では、似た環境や被害の予想される市町村があるので、今後は、津波防災まちづくり法により、減災としての事前まちづくりの検討を考える市町村も増加すると考えられるので、実際の取組みに活かせるように、プログラムの構築や実践につなげていきたいと考えている。

○キーワード 復興計画 防災教育 若い世代の参画 集団移転  
事前復興まちづくり訓練

## 1. 東日本大震災の復興まちづくりの課題と計画の策定・実行プロセス

### 1-1. 東日本大震災の被害と災害対応の特徴

東日本大震災の被害は、広域な地域に甚大な被害をもたらした。特に、宮城県沖地震に備えていた市町村では、普段から住民の防災意識も高く津波避難訓練の参加率も高い地域も多かった。しかし、市町村が公表していたハザードマップの危険区域をはるかに超える地域が浸水し、想定を超える高さの津波が来襲した。

市町村の防災計画では、庁舎が被害を受け、全く使えない、職員の多くが犠牲になった場合の行政としての業務継続について、詳細に検討しているところは少なく、行政機能が低下した市町村の災害対応および復興計画の策定作業は、厳しい環境のなかすすめていかざるを得なかった。

また、3月中は、燃料が不足し、各県庁と市町村との連絡体制が不安定で、支援に必要な情報が不足した。

### 1-2. 東日本大震災の復興の取組みと課題

東日本大震災の復興計画の策定は、様々な困難があった。先に述べた行政機能の低下と技術職員を含めた人材の不足、住民情報や土地家屋情報の流失、震災前に居住していた土地である浸水域の扱い、復興計画に記載された事業の実施を担保する財政的な裏付けの確定が遅れたこと、など。

住民も、どこに住んで良いのか見通しが見つからないなかで、一部は市町村外に広域避難、借上げ仮設住宅に住む為の遠隔地への転居、市町村外の応急仮設住宅への転居など、復興まちづくりや生活や住宅再建支援に関する情報が不足する中で生活を続けることとなった。

### 1-3. 南三陸町における復興計画の策定と計画の実施に向けての取組み

#### (1) 甚大な被害を受けた南三陸町

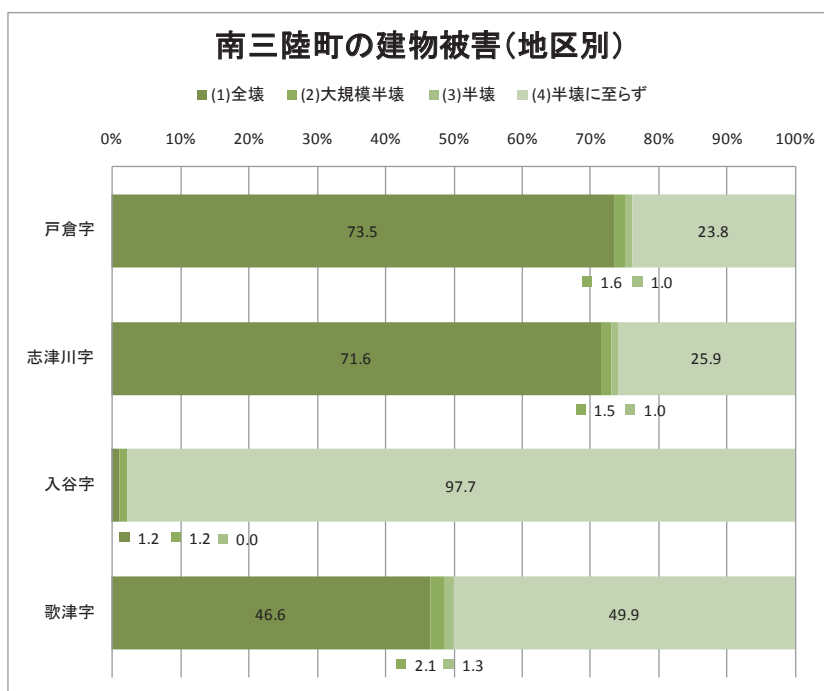
漁業とその関連業や観光で賑わう自然の恵み豊かな町、宮城県本吉郡南三陸町は、東日本大震災により甚大な被害を受けた。もともと住民の津波避難訓練の参加率も高い町で、しかも、水門や防災情報関連の施設も整備したばかりの時に、想定を超える津波に打ちひしがれた。死者・行方不明者は793名（8月31日現在）、半壊以上の家屋は町全体の6割を超えた。

#### (2) 行政機能の低下と「受援体制」をつくることの難しさ

災害対応にあたる役場の行政機能の低下も懸念された。津波により、役場庁舎や防災庁舎も流された。役場職員のなかにも亡くなった方や行方不明者が多い。特に、津波来襲時に防災庁舎のある本部にて対応にあたっていた、課長級以上の管理職が多く犠牲になった。加えて、行政職員の大部分が住宅を失い被災者となり、業務を行う際に必要な

役場内の様々な資料等も流失してしまった。

全国から多くの自治体職員等が行政機能の回復や被災者支援に訪れ活動したが、応援職員の大部分が、1週間という比較的短期間で交代することなども含め、応援を受ける町の「受援体制」の構築も課題となった。また、ライフラインが途絶し、インターネット回線やメール等の通信もごく限られた状況のなかで5月末まで業務を行わざるを得ず、プレハブ庁舎のあちこちで報道機関の取材陣を見かけ、毎日のように報道される南三陸町は実は役場の情報収集方法や外部との通信方法が限られている状態であった。



図表3 南三陸町の被害(地区ごとの集計)

### (3)南三陸町の震災復興計画の特徴

南三陸町の震災復興計画は、震災前からあった町の総合計画の流れを引き継ぐものとして、まちの将来像を「自然・ひと・なりわいが紡ぐ安らぎと賑わいのあるまち」とし、図のように、3つの目標と2つの方針から成り立っている。特に、目標1の「安心して暮らせるまちづくり」では、震災前の居住エリアの後背地の比較的近いところに高台があるため、被災家屋の移転を計画している。



図表4 南三陸町 復興計画の目標と方針

#### (4)南三陸町役場での支援

南三陸町にかかわるようになったのは4月の初めころからで、所属組織（人と防災未来センター）が震災直後から6月まで、宮城県庁内に設置された政府現地災害対策本部内で活動していた関係で、復興計画策定のための人材派遣について打診があり、その後、神戸と南三陸町を往復する生活がはじまり、初夏からは南三陸町にほとんど滞在する形で支援を行った。



写真1 南三陸町（志津川）の被害



写真2 仮庁舎 配置図



写真3 震災復興推進課



写真4 震災復興推進課 事務室内の様子

#### (5) 町役場内の震災復興計画策定組織とスケジュール

復興計画の議論の場として、南三陸町震災復興計画策定会議（学識者等で構成、6/10から9/18まで4回開催）、震災復興町民会議（町内の各組織代表10名と立候補者14名で構成、7/8から8/23までの5回開催）が設置された。

事務局については、当初は企画課内で担当し5月後半に震災復興推進課が創設された。庁内では、民生・産業・生活・ライフライン・防災5つの分科会で、復興計画を実施するために必要な事業内容のリストアップなどが行われた。

また、これらに先立って、役場全体が復興へのイメージが少しでもわくようにと、集団移転事業を用いて復興した、北海道南西沖地震の奥尻島の復興事例の紹介と（北海道大学 定池祐季助教）と新潟県中越地震の旧川口町の事例の紹介（山の暮らし再生機構 星野晃男氏）する勉強会を行った。

#### (6) 市民の意見を計画にどのように取り入れていくか

市民の意見を計画にできる限り取り入れていくために、先に述べた震災復興町民会議と地域懇談会（町内外の避難所や仮設住宅集会所等23カ所で7月下旬に実施）。

震災復興町民会議は、宮城大学の地域構想学部が中心となってワークショップ形式で行われた。検討の結果は、毎回、町ホームページに「かわら版」として公表され、提言「復興への私たちの想い」を町に提出した。提言では、復興を先導し他の取組みなどへの波及効果が期待される事業を連携させ戦略的に展開するための、5つのシンボルプロジェクト（「津波の教訓伝承プロジェクト」「被災者の生活支援プロジェクト」「命を守ろプロジェクト」「まちの賑わい復活プロジェクト」「『絆・感謝』プロジェクト」）を提示した。

地域懇談会は、7月下旬に、町外に避難している方が多い避難所や仮設住宅の集会所



等で、町職員（町長か副町長も出席）が町の復興方針について説明した上で、グループに分かれて進行役（宮城大学、人と防災未来センター）をたてながら、高台移転を含む復興まちづくりなどについて、ひとりひとりの意見が記録されるよう配慮して話し合いを行った。

流出家屋の高台移転については基本的に賛成する町民がほとんどであり、早期の住宅再建のための用地についてや、自力再建が難しい高齢者を中心とした世帯のための復興公営住宅の建設についての意見がだされた。しかしながら、特に市街地（浸水した地域には原則的に仮設住宅を建設できないことから、隣接する登米市の仮設住宅などにいる世帯も多い）に居住していた世帯から町に対して早期の住宅再建の見通しを示し実現してほしいという意見が多かった一方で、町内の多くの漁村に居住していた漁業関係者からは「仮設住宅に入ったので、まずは住宅再建よりも産業再建のための施策を優先してほしい。そうでないと住宅を建設する費用を確保する見通しも立たず、雇用を求めて若い世代が流出する。」などといった、仮設店舗や事業所を含めた産業再生のための環境整備を求める声が強かった。復興計画にも示されているように、美しく豊かな海と共生する町では、漁業従事者は町民の2割程度だが、海産物の加工・運搬・販売や自然や海の幸を求めてくる観光客のための宿泊施設など、漁業を中心とした産業の輪がまわりながら経済が成り立っている。産業の再生が町の持続可能性にとっても最重要課題のひとつであることは間違いない。

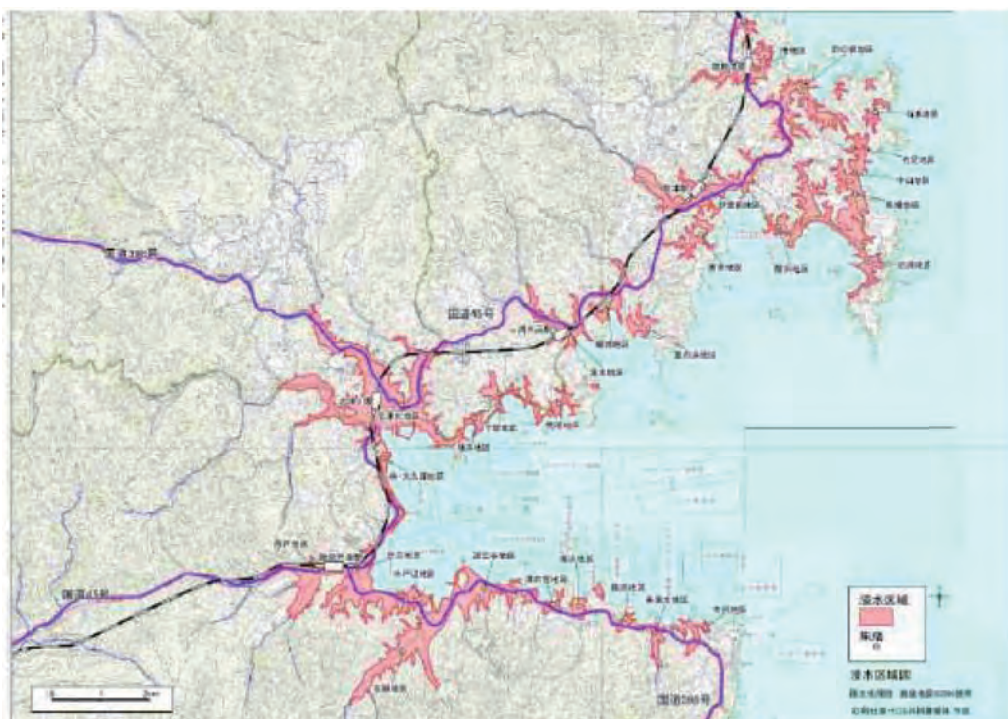


図表5 南三陸町の復興計画策定における市民参画

そのほか、全町民に町からの情報が伝わるよう、また復興に向けての意向を把握するために、震災前の町民全世帯に対して、震災前の住所に意向調査票を送り郵便局にて転送してもらい調査を実施し、6割強の世帯から回答を得た。全国に避難している町民の意向をどのように復興計画に取り入れるか。被災者の支援を充実させることができるか。被害が甚大で広域であったからこそ、特に重要な課題である。

### (7)町と国県との関係性

計画に盛り込む事業の調整と並行して、復興計画のなかでも重要な土地利用に関連して、三陸道の延伸や被災した国道の扱い、県管轄の第二種漁港や同じく県の港湾や河川堤防の復旧と、町がすすめるまちづくりの整合性をとるための、実務者レベルの調整が続いた。これらによって町の構造や海への眺望、景観などの大部分が規定されるからだ。宮城県沖地震等の比較的頻度の高い津波（L1 レベル）と、今回のような低頻度津波（L2 レベル）について、国や県でシミュレーションを行い、L1 レベルで堤防の高さを設定し、町の土地利用計画をもとに L2 レベルの計算を行い調整していく。このような作業や被害状況把握、土地利用の検討などは、なかなか小規模自治体単独では実施することが難しいため、国土交通省の調査事業としてコンサルタントが受注し、国・県・自治体が連携して検討している。



図表 6 南三陸町内の浸水区域図（国土交通省）

### (8)避難生活、産業の再開とまちの復興 復興計画と地域性

南三陸町では、2つの市街地と20以上の漁村等の集落が点在しており、人口の約半数が集落に住んでいる。小さな湾ごとに漁村があるというイメージで、それぞれの集落の世帯や各地区の漁協に受け継がれてきた地先漁業権を持って漁業が成り立っている。集落それぞれがライバルという意味では隣接する集落との関係性は農村のそれとはまた違うといえる。そういった集落相互の関係性をひとつずつ聞きながらでないと、簡単には複数の集落を集めて復興という訳にはいかないし、各集落の全壊率によって、被害の小さかった家と移転世帯の空間的なまとまりを考えるなど、集落復興の考え方も変わってくる。

また、多くの集落では、入会地などの財産を持つ世帯が「契約講（あるいは契約会）」という組織をつくっており、その代表者と行政区の自治会長が異なることも多い。集団移転先に集落内の契約講が所有する土地を希望する集落もあり、合意形成に向けて土地の共同所有者である契約講会員だけでなく、実際に移転する集落住民全体との話し合いの場づくりなど、独特の課題もある。



図表 7 南三陸町内の高台移転（案）（南三陸町復興計画）

## (9)被災者の生活

当初は仙台や石巻等から役場に通っていたのだが、初夏からは町内のホテルに宿泊することができた。町内のホテルや民宿で海沿いにあったところは被害が大きかったが、比較的高い位置に建設されていて浸水しなかった宿泊施設は、災害救助法による町内二次避難所として、町民が生活していた。町内は長期にわたり断水していたので、ホテルも給水車で配水され、当初や部屋のトイレは使用できず仮設や共用部分のトイレを使用していた。

一次避難所の環境に比べれば、ある程度のプライバシーや生活環境が確保できるが、水が使えないことや自家用車が流された世帯が多いため、料理や洗濯、買い物など家事をすることも出来ない。

南三陸の朝は早い。朝早く朝食会場やロビーにいくと、ソファで海を眺めながらもの想いにふけるひと、会話する女性達が多くいた。ふと耳を澄ませると「食事をして部屋に戻って。ここにいられることは有りがたいが、今日も明日も何もすることがない、そんな毎日が続いていく」というつぶやき。復興の見通し、まちづくりの方向性を早く伝えること、雇用や産業再生など、元のように安心して暮らせるまちをつくっていくことの重要性を実感した。

また、多くの被災者が、受け入れ申し出のあった周辺の市の宿泊施設等の二次避難所に避難していたが、広報等で知らせたとしても、どうしても町の情報、特に復興に向けての情報が入手しづらいなど、地域懇談会でも「取り残されているような気がする」との指摘もあった。町役場も、地域懇談会でひとりひとりの意見を聞き、全世帯の意向調査を実施するなど、そういった不安が軽くなるよう努力している。

## (10)復興計画策定までの過程

これまで述べたように、南三陸町における震災復興計画の策定では、海と共生し安全な町をつくるという方針のもと、震災復興町民会議や地域懇談会および全世帯への意向調査を通じて、町民の意見を計画に反映させる工夫を行ってきた。計画を実現させる国の補助制度や復興財源の規模の見通しが無い段階での震災復興計画の策定過程で、町役場も迷い悩みながら、町民への説明を続けてきた。9/18に復興計画策定委員会です承された素案は町役場内の了承を得た。その後町議会で審議される12月末に復興計画として承認、公表された。

## (11)計画の実行に向けて

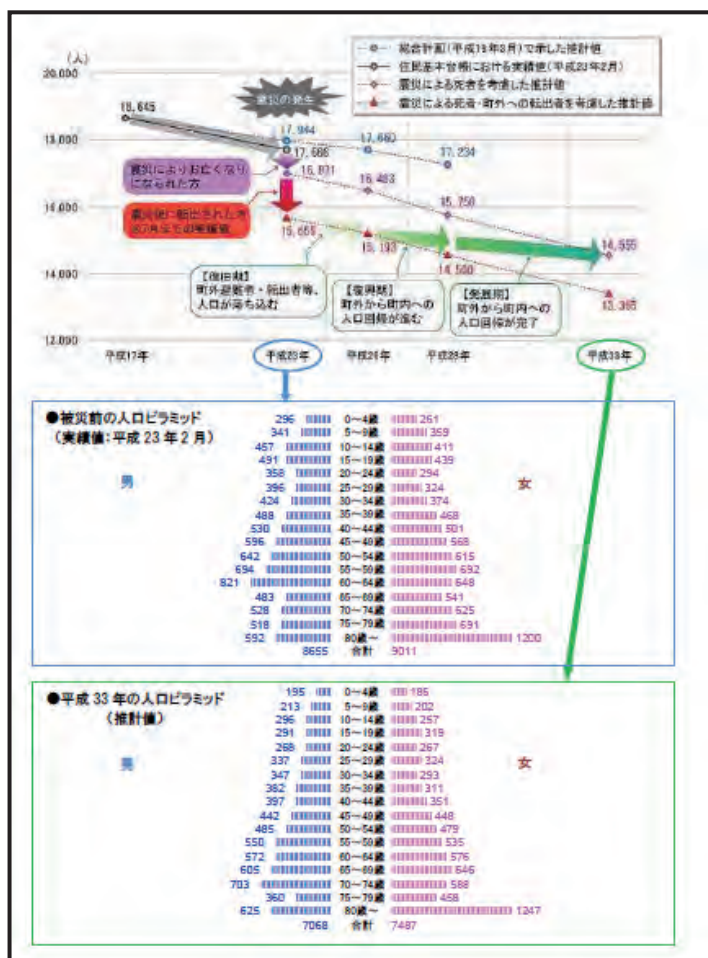
震災復興計画の策定されたあとは、実現していくために動いていかななくてはならない。町の高台移転に総論としては賛成の町民も多いかもしいが、実際に自分の地区、自分の集落がどこに移転するのか、自分の震災前の土地はどうなるのか、住宅再建までどのくらいの時間がかかり金銭的な負担はどうなるのか・・・といった世帯ご

との現実の問題になってくると、不安でいっぱいになる町民も多いと察せられる。計画実現のための説明や合意形成には、多くの多様な立場の人々の協力が必要である。また、町民がまちづくりを検討しすすめていくための組織づくりや、町民と行政を結ぶ専門家や中間支援組織などの体制づくりも必要になってくるだろう。加えて、地域によって合意形成が早く、地域復興計画がつくられ早期に実現に向けて動くところと、住民が散らばっていることや生活再建の困難さ等からまちづくりの話し合いがなかなかすすまない地域とのスピードの差もでてくるかもしれない。

人口減少・高齢化社会のなかで、成熟期の本当の意味で豊かな復興、持続可能なまちづくりとは何かを常に考えながら走らなくてはならないし、シビアに人口に見合った新たなまちづくりを考えていかなくてはならないだろう。

### 1-4. 東日本大震災の被災地の人口動態をめぐる実態と課題

沿岸部の市町村の例として、南三陸町をみてみると、震災前に17,686人だった人口が、震災の死者や行方不明者、震災後に転出された方を除いて、15,665名と約2,000名の人口減となっている。町の推計では、今後も人口は減り、震災10年後には13,000人台になると予想されている。町では、復興まちづくりにより、町外から町内へ町民が戻ってくると予測しているが、実際のところ、生業で海に関連する産業の内陸の交通の便が良く津波の心配もない土地から、どれだけの人々が戻ってくるかは予想しにくい。



図表8 南三陸町の復興と人口推移予想 (南三陸町復興計画)

## 1-5. 小括

第一章では、東日本大震災における復興まちづくり計画の策定・実行プロセスをまとめ、特に、若い世代に関係するような復興の課題について整理した。

東日本大震災では、岩手・宮城・福島の沿岸部が津波により甚大な被害を受け、大規模な広域避難（避難所を被災市町村外に設置）が実施されたり、宮城県では応急仮設住宅数を上回った県借上げ仮設住宅（空き家を県が借り上げて被災者が居住する）に居住するために、賃貸ストックの多い近隣の都市部へ被災者が移動したりしたために、震災発生から仮住まいの時期に、被災地全体での人口移動の現象がおきた。

一般的に、「災害は地域の変化を加速させ、潜在する地域の課題を顕在化させる」といわれているが、東日本大震災においては、個別の引っ越し以外にも、公的な住宅支援制度の利用に伴う、被災者の沿岸部から内陸部への、集落部から周辺の都市部への移動があった。この人口移動は、仮住まい期だけの現象にとどまらず、復興まちづくりが進み、本設の住宅が建設される過程においても、少なからぬ世帯が、震災前の市町村に戻らず、沿岸被災市町村では人口減少の傾向に拍車がかかることが懸念される。このような世帯ごとの、車社会の生活圏をもとにした人口移動とは別に、高校卒業後等に、故郷を離れて就職や進学のために転居する人も多い若い世代が、これからの自分自身の将来をどのように考え、また育った地域の復興にどのように関わっていくかは重要な課題である。一方で、わが国有数の漁場である三陸の海は、地元でも「豊穡の海」と言われており、比較的次世代の人材も豊富でわが国の漁村の高齢化率に比べると低い地域も存在する。

復興計画は、国の予算措置の時期、すなわち、平成 23 年度第三次補正予算の決定の時期より早く議論されており、市街地も含めた地域の復興の具体的な絵が見えてきたのは、平成 23 年度後半以降であり、特に集団移転も含めた各集落の復興の具体的な内容（移転地の場所や、移転先の集落配置、震災前居住地の利用方法等）は、市町村の復興計画が策定されてから、ようやく検討が本格化したところである。海岸沿いから高台への移転は、すなわち、生活上は条件不利地に移転することを意味する。このような復興計画には、どんなことが必要なのか。ひとは安全という要素だけでは、たとえ高台に移転したとしても、漁業をはじめ産業が再開され、豊かなで充実した暮らしができなければ住み続けることは難しい。本研究では、南三陸町の復興計画の策定の議論がひと段落した後、事業化に向けて検討がはじまっている状況のなか、中学生と共に、「自分と町の未来」について考えるプログラムを構築することとした。

### 【参考文献】

南三陸町 南三陸町震災復興計画（2011.12.26）

石川永子「南三陸町における震災復興計画の策定プロセス」月刊自治研 11 月号，2011, 11

石川永子, 池田浩敬, 澤田雅浩, 中林一樹, 「被災者の住宅再建・生活回復から見た集団移転事業による被災集落の復興に関する研究 — 新潟県中越地震における被災集落の事例を通して —」, 都市計画学会 学術研究論文発表会論文集 2008

石川 永子, 照本 清峰, 澤田 雅浩, 福留 邦洋, 「中山間地域を含む地方都市における復興公営住宅の地域との関係性に関する研究—新潟県中越地震を事例として—」 地域安全学会 梗概集 No. 26, p79-80, 2010. 6



## 2. 災害後の若い世代の生活環境との復興まちづくりへの参画の機会

### 2-1. 被災後の中学校の状況 中学生のおかれた環境

被災市街地の高台に立地し津波による被害を免れた学校では、校舎を避難所としたため、住民だけでなく多様な支援者による活動が行われた。また、校舎が被災した学校は内陸部等の仮校舎で授業を再開した。

#### ①南三陸町立志津川中学校

志津川中学校は、南三陸町役場のあった志津川の市街地をのぞむ高台にあり、津波被害をまぬがれた。避難所として多くの避難者を受け入れた。グラウンドに隣接して応急仮設住宅が102戸建設された。



写真5 志津川中学校から被災した市街地をみる



写真6 志津川中学校（学校HPより）



写真7 校庭の応急仮設住宅からみた校舎



写真8 応急仮設住宅外観

## ②南三陸町立戸倉中学校

戸倉中学校も戸倉地区の市街地を望む高台にあるが、校舎1階部分および体育館が被災したため、隣の登米市の旧善王寺小学校の校舎を戸倉小学校とともに使用して授業を再開した。生徒の約半数が登米市等の応急仮設住宅や県借上げ住宅等で生活している。また、浸水した戸倉中学校のグラウンドにも50戸の応急仮設住宅が建設された。



写真9 戸倉中学校から町をみる



写真10 1階が津波により被害



写真11 体育館の被害



写真12 登米市の旧善王寺小学校校舎にて授業再開

(戸倉中・戸倉小)



図表9 戸倉中学と仮校舎の位置

## 2-2. 東日本大震災の復興における若い世代の取組み事例

被災した子どもの支援は、心のケアや、遊び場の提供、受験生や仮設住宅で勉強部屋が確保できない生徒等を対象とした寺子屋など、様々な支援が行われている。

しかし、十代を対象とした復興まちづくりの検討の事例は少ない。こども環境学会では、「東日本大震災こども支援プロジェクト」の一環として、復興プラン提案競技が行われ、優秀作品を冊子にして、被災市町村に配布するなどの活動がされている。

## 2-3. 小括

第二章では、災害後の若い世代の生活環境との復興まちづくりへの参画についてまとめた。被災市街地の高台に立地し津波による被害を免れた学校では、校舎を避難所としたため、住民だけでなく多様な支援者による活動が行われた。

未曾有の津波により、中学生の心の傷も深く、生徒を指導する教員にも、生徒への接し方や防災教育、復興に向けてどのように進んでいけばよいのかといったことを伝えるのに、迷い葛藤があるとのことであった。

一方で、内陸部の避難所や応急仮設住宅、県借上げ住宅に住む生徒が多い学校では、町からの情報がどうしても少なくなってしまうために、正しい情報を知り、かつ、今一度、自分が育った地域の復興について考える機会が必要であると感じた。

東日本大震災以後、未成年者を対象として、復興まちづくりの提案などの取組みが行われたものとしては、こども環境学会による「東日本大震災こども支援プロジェクト」の一環として、復興プラン提案競技が行われるなど、こどもの生活環境から復興を考える取組みがなされている。しかし、総合学習の授業として、全員が議論しながら復興を考えるプログラムが行われている事例は少ないのではないかと推測される。

### 【参考文献】

こども環境学会ホームページ「東日本大震災こども支援プロジェクト」  
宮城県南三陸町立志津川中学校「志津川中学校245日間の歩み」

### 3. 事例1 被災市街地内の中学校での研修の実施

3章および4章では、南三陸町の町立中学校を対象として行った実践研究について述べる。3章では、町内の被災市街地を見下ろす高台に立地している同町立志津川中学校での事例について、4章では、校舎が被災し、隣接する内陸部の登米市の旧善王寺小学校の校舎で授業を継続している同町立戸倉中学校の事例についてである。

2校は、被災後の校舎の立地条件や生徒の居住地域等が異なり、復興まちづくりに関する取組みの方針も異なったため、それぞれ別の方法を取りながら、総合学習の授業として、本研究の授業を実施した。

#### 3-1. 教員への研修（心のケアなど復興を考える前の段階での検討）

##### (1) 教員研修の概要

被災市街地内の校舎で授業を継続している志津川中学校では、2011年夏の段階で、心の傷が深く、とても復興まちづくりに関して検討できるような状況ではない生徒もいた。そのため、復興まちづくりの検討の前段階として、震災から半年を振り返り、心のケアを意識した活動や、災害後の防災教育に関するカリキュラムを行なうこととした。本研究では、同校教員が、防災や復興に関する総合学習のカリキュラムを検討するために参考となるような知見を提供した。研修では、北海道大学の定池祐季氏が、十代で北海道南西沖地震にて被災した後、防災分野の研究を志した専門家としての経験や、被災した当時の中学生の心鏡や学校の様子、被災した生徒の進路選択に関する研究等について話した。

日時 : 平成23年 9月8日(木) 14:00~17:00

場所 : 宮城県南三陸町志津川中学校

講師 : 北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター  
助教 定池 祐季氏

研修内容 : 「被災後の中学校における防災教育について」(資料編1に掲載)

参加者 : 同校中学校教員 約30名

##### (2) 講師の所感

先生方の話からうかがえる、中学校の子どもたちの様子は自分を含めた、奥尻の子どもたちとの共通点を感じました。子どもたちは大人の様子をよく見ている、心配させないように過剰にがんばったり、明るく振る舞ったりする場合があります。

取材が来ると、前向きな発言をした方がいいのでは、というプレッシャーを感じたりもします。行き場のない気持ちをどこにぶつけていいかわからない子もいます。

先生方をお願いしたのは、先生方は生徒にとって信頼できる大人であってほしいということ、無理に気持ちを前に向かせたりせず、ありのまま受け止めてあげてほし

いこと。部活など、その子にあった打ち込めるものを一緒に見つけてあげてほしいこと。先生を信頼できれば、大人になって同窓会で集まったときに、辛い時のいい思い出を語り合うことができると思います。そうなってほしいという強い願いを持ちました。



写真 13 教員研修の様子

### 3-2. 生徒への研修（被災時に高校生だった神戸の被災者との交流）

#### (1) 全校生徒研修の概要

被災した中学生は、震災後の不安定な生活のなかで、中学卒業後の自らの進路について悩むことも多い。その時に、少しずつ、将来に向かって前向きに生きていけるようにと企画した。阪神・淡路大震災の際に神戸市内の高校生であった竹内氏に、自ら通っていた学校が避難所になった経験や、一度会社員になった後に、震災の体験をもとに消防士になりたくて努力した日々の体験、現在の仕事（地域防災力の向上のための普及啓発活動、発展途上国の防災に関する支援等）に関する話をしていただいた。

日時 : 平成 23 年 9 月 16 日（金）13:00～14:30  
場所 : 宮城県南三陸町志津川中学校  
講師 : 神戸市消防局 予防部予防課地域防災支援係 竹中邦明 氏  
研修内容 : 「阪神・淡路大震災から現在までの、私の道のり」（資料編 2 に掲載）  
参加者 : 中学校生徒・教員 約 150 名



写真 1 4 教員研修の様子

## (2) 講師の所感

阪神・淡路大震災で近い身内を失ったわけでも、自分の住む家を失ったわけでもない私が、壮絶な被害を受けた志津川中学校の生徒を前にお話させていただくことに戸惑いを感じましたが、阪神・淡路大震災を目の当たりにし、それによって人生が大きく変わった人間として、少しでもお力になればという想いでお受けさせていただきました。

震災からわずか6ヶ月しか経っていない状況ですべき話かどうか迷いましたが、希望を持って欲しいということと、その希望を10年後、20年後、もっとかかるかも分からないけれど、大人から引き継いで、今の中学生や高校生の世代がしっかり実現させて欲しいという想いをこめて、誰かに聞いた話ではなく、僕自身が体験し、感じてきたこと「地震があったことで、地震に負けまいとする人々が生み出すプラスもある。」ということテーマにお話させていただきました。

最初に体育館に入ってくる生徒の様子を見て、他の中学生と変わらずに、はしゃぎながら入ってくる生徒もいるという状況があり、「子どもは大人が思うよりも強いんじゃないかな。」と安心しました。

僕のつたない、個人的な体験談を皆さん最後まで静かに集中して聞いてくださっていたと思います。先生方の、集中してうなずきながら聞いてくださる姿にも感動しました。僕の話が今後復興していく皆さんの何かのきっかけになれば幸いです。

震災から1年が経つ3月になって、被災地の中学校・高校の卒業式のニュースをよく見ます。そのニュースの中で、「消防士（消防団員）になって自分の町を守りたい。」というコメントを何度も見ました。その中には南三陸町の方もいました。僕も震災を

経験して消防士を志すことになりました。消防士に関わらず、いつかそれぞれの目標を実現させて、また会える日が来たら、僕にとっては「地震があったことで僕たちが生み出した素晴らしい出会い」がまた一つ増えます。

最後になりましたが、皆様のご健闘を心よりお祈りし、今後も末永く遠くから出来る限りのことをさせていただきたく思っています。この度は、本当に貴重な機会をいただきありがとうございました。

### 3-3. 小括

第三章では、被災市街地の中に立地する宮城県南三陸町の志津川中学校での支援活動について述べた。

志津川中学校では、震災前から防災教育に熱心に取り組んでいた。当初、過去の災害の体験者による講話等だけではなく、本研究の中で、復興まちづくりの検討についても総合学習で行う予定であった。しかし、2011年夏の段階で、復興について考えられるような状況でない生徒もいるということから、教員や全校生徒への研修を通して、学校が行う総合学習（震災半年を振り返りながら防災についても学ぶ）のカリキュラム作成を行う際の支援を行った。同校の総合学習の時間における本研究の関与は限定的ではあるが、甚大な被害を受けて避難所となった中学校における総合学習の内容を検討する際に配慮すべき点について検討した。

また、これらの活動により、同校は、防災甲子園において「東日本大震災被災地特別賞」を受賞した。同賞の授賞式で神戸を訪問した際には、まち歩きや復興に関わった方々の話を聞いて、より具体的に復興のイメージが描けるようになったという感想があった。過去に被災し復興したまちの見学や、そこに生活する人々との交流が、若い世代にとって有効であるかが、改めて明らかになった。

#### 【参考文献】

- ・宮城県南三陸町立志津川中学校「志津川中学校245日間の歩み」

#### 4. 事例2 広域避難・仮設校舎の中学校での実践と分析

戸倉中学校では、被災した地域から離れた地の校舎で毎日の学習を継続し、震災後は町外に居住する生徒が多い。そのため、学校側が生徒が自らの町の復興に向けての動きを知り、地域の復興を考える機会を持ちたいと考えていた。3年生の総合学習の復興まちづくりに関する授業について、震災半年後から支援することとなった。

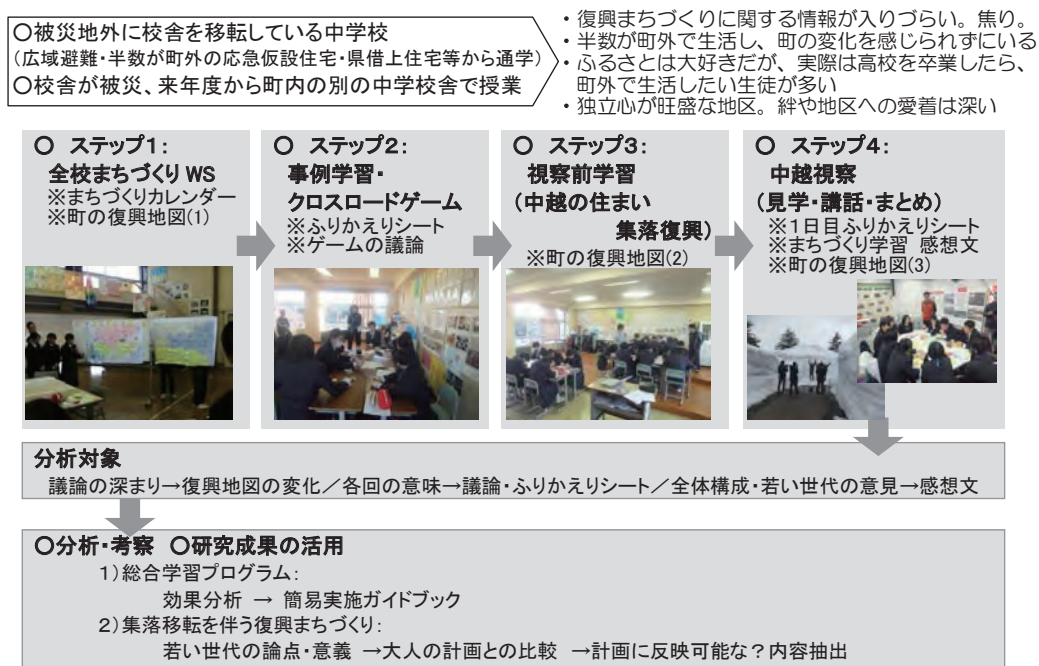
##### 4-1. 戸倉中学校での復興まちづくり授業の概要

###### (1) 目的

戸倉中学校の総合学習の時間を利用しての復興まちづくりに関する学習では、3つの点を目標とした。①自らのこれから10年と町の復興過程の10年を重ね合わせ、復興プロセスをイメージする、②今後町外へ転居する生徒も含め、町の復興について若い世代が関心を持ち主体的にかかわる方法を考える、③特に若い世代にとって魅力的な町の復興まちづくりとはどのようなものか検討する。

###### (2) 授業スケジュール

3年生20名を対象とし、図表9のように、4回の授業等を通して検討していく。特に、「町の復興地図」に関しては、学習をすすめるごとに提案を書き込んでいき、議論が深まっていく過程を記録することとした。また、若い世代が感じているジレンマに着目して、自らの将来の夢と地域への愛着やまちづくりへの参加の間での葛藤や、利便性を求めることと今までの地域の良さを残すことのバランスなど、若い世代が考える本音の部分を議論できるよう配慮したプログラムとした。



図表10 戸倉中学校のプログラムのながれ



図表 1 1 各回の概要

日時	授業	内容
平成 23 年 10 月 27 日	復興まちづくりワークショップ（全校生徒）	「戸倉の思い出、良い点」「自分と町のこれから 10 年」について考える
平成 23 年 12 月 16 日	過去の災害からの復興事例を学ぶ クロスロードゲーム（議論）	奥尻島や中越の集団移転の事例や長期的な課題を知る。復興過程の若い世代のジレンマに関する議論
平成 24 年 2 月 28 日	視察地に関する事前学習 戸倉地区の復興について 2	中越の復興、集団移転等の学習 戸倉地区の復興のアイデア出し
平成 24 年 3 月 3 日～4 日	新潟県中越地震被災地視察 戸倉地区の復興について 3	復興住宅視察、集団移転地視察、復興に関わった方の講話 戸倉地区復興のアイデアまとめ

#### 4-2. 各回の内容

##### (1) 第一回授業 復興まちづくりワークショップ（全校生徒）

###### ①概要

実施：戸倉中学校・人と防災未来センター 共催 南三陸町 協力

日時：平成 23 年 10 月 27 日 AM10:00～12:00

場所：南三陸町立戸倉中学校仮校舎（元善王寺小学校 登米市内）

参加者：中学校生徒 1 年生 17 名、2 年生 18 名、3 年生 20 名

中学校教員 南三陸町職員（震災復興推進課 及川課長 菅原係長  
阿部氏 清水氏）

各班ファシリテーター

実施体制：学年ごとに 2 班ずつ 計 6 班

各グループにファシリテーターと戸倉中学校教員がつく。

模造紙、町／戸倉全体の地図・模型などを使ってグループワーク

班分け	人数	ファシリテーター
1 班：3 年生 A 班	9 名	石川（人と防災未来センター）
2 班：3 年生 B 班	8 名	石塚（中越防災安全推進機構）
3 班：2 年生 A 班	9 名	阿部（南三陸町）
4 班：2 年生 B 班	9 名	薬袋（日本女子大学）
5 班：1 年生 A 班	10 名	清水（南三陸町）
6 班：1 年生 B 班	10 名	村上（三菱総研）

図表 1 2 ワークショップの流れ

時間	内容	備考
3分	校長先生か教頭先生の挨拶	
10分	今日のグループワークの説明	石川
10分	町の復興計画・戸倉地域のまちづくりについて	町職員
70分	ワークショップ開始  <グループワーク1> 30分 「10年後、20年後どんな暮らしをしていきたいか」 ・アイスブレイク 5分、説明 ・ポストイット記入 5分 ・話し合い20分  <グループワーク2> 40分 1) 「どんなまちになったらよいか。どんなことに気を配ってまちづくりをしたいか。」たとえば ・南三陸町全体と戸倉地区 ・高台のまちづくり、低地のまちづくり ・産業の復興 ・若い人が活躍できるまち ・高齢者や子どもにやさしいまち ・安全なまち 2) 議論を深めるテーマ1つをきめ、さらにアイデアを出し合う	各グループ進行役           各班 必要に応じて模型を見に行く
20分	各班発表	各班代表（生徒）
10分	各研究員・町職員の感想（講評）	
2分	先生のお話	



写真 1 5 町職員による復興計画の説明



写真 1 6 各班の発表の様子

②復興カレンダーと復興地図の作成（各班の検討結果は資料編3に掲載）

南三陸町の震災復興推進課より、復興計画に掲載されている「復興の道すじ」をもとに、10年間の町の復興過程について説明を受けた。その後、各班で、「自分のこれから10年」と「まちの10年」をイメージして、復興カレンダーを作成した。また、南三陸町の地図に「地域の好きなところ、思い出」「まちの復興に関するアイディア」を書き込んでいった。最後に、各班の検討結果を発表し合った。

図表 13 復興の道すじ（南三陸町復興計画）

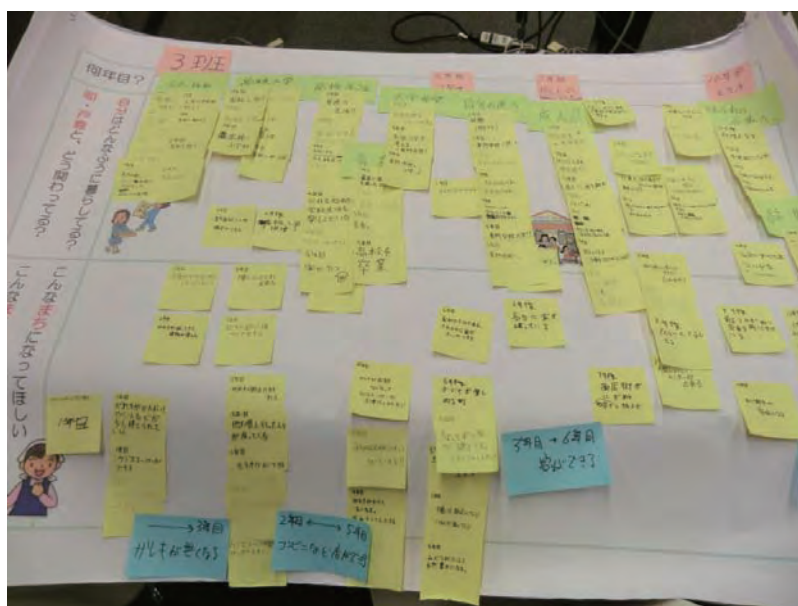
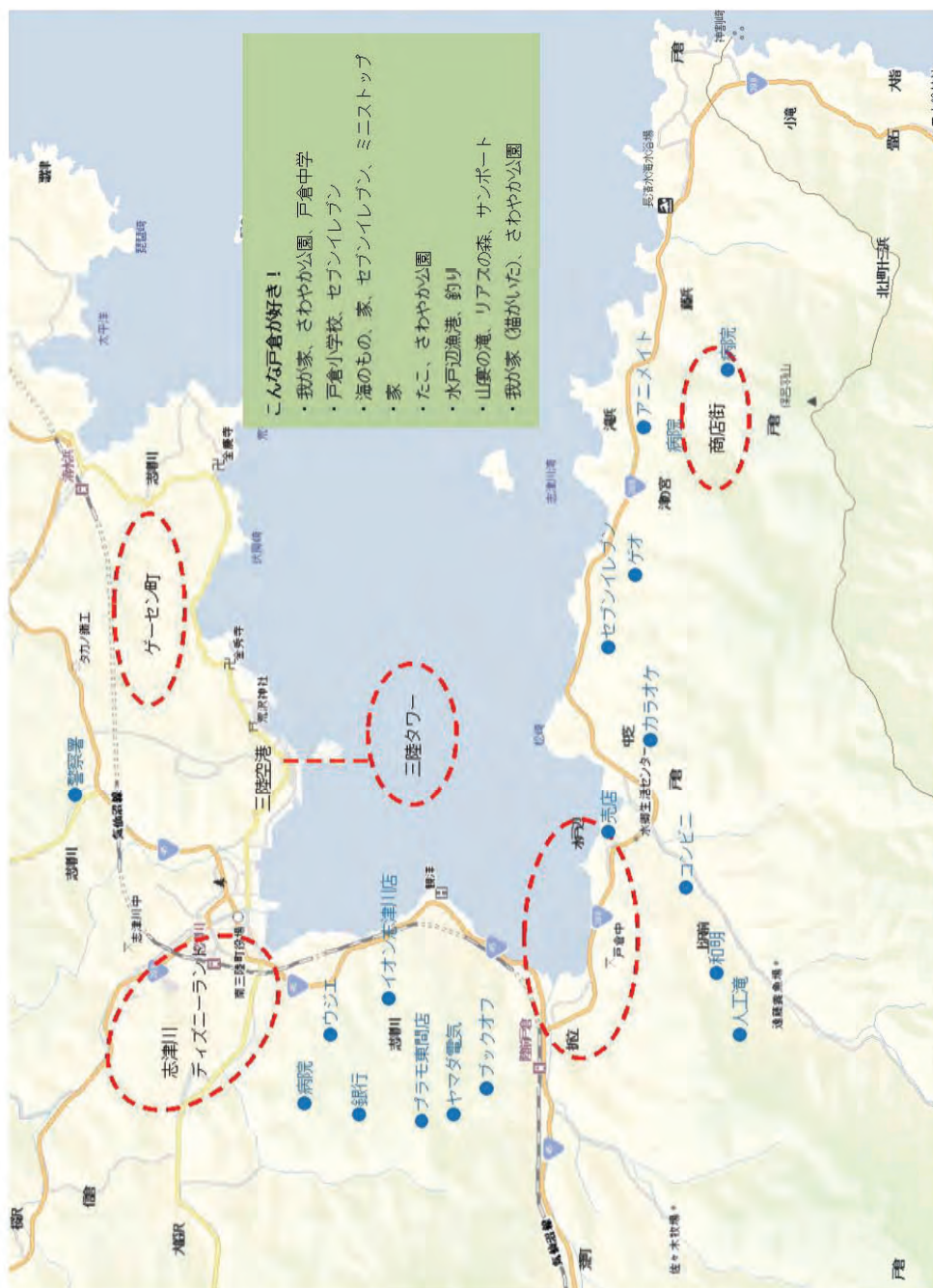


写真 17 各班がまとめた復興カレンダー

何年目?	2年目:	3年目:	4年目:	5年目:	6年目:	7年目:	8年目:	9年目:	10年目:
町・戸倉と、もっと関わりたい。	志中に移動	高校入学	高校生活	or 自分の道へ	成人式	成人式	成人式	成人式	それぞれの仕事へ
自分は今なららに暮らして。	志津川中学校に移動	志津川中学校に移動	志津川中学校に移動	志津川中学校に移動	志津川中学校に移動	志津川中学校に移動	志津川中学校に移動	志津川中学校に移動	志津川中学校に移動
こんなまじりになってほしい	1年目:	2年目:	3年目:	4年目:	5年目:	6年目:	7年目:	8年目:	9年目:
こんなまじりの方ができたらいい	1年目:	2年目:	3年目:	4年目:	5年目:	6年目:	7年目:	8年目:	9年目:

図表 1 4 復興力レンダラーの作成 (3 班の例)



図表 15 戸倉地域のまちづくりについて（提案地図）（3班の例）

### ③ワークショップの成果

戸倉地域の良いところや思い出について語り合った。現在の居住地に関わらず、地域に深い愛着を持っていることがわかる。自然が豊かなところ、人のつながり、思い出の場所などについての意見が多くだされた。各班のファシリテーターによる振り返りの意見（図表14～17）をもとに考察する。

図表16 「地域の良い点」についての各班の意見

戸倉の良いところ・好きな所	
1班(3年生A班)	自然が豊かなところ、静かなところ、雰囲気や人とのつながりなどをあげる生徒が多かった。道路を走る車が少ないので道路で遊ぶ、水が美味しいなど、町外で暮らしていても、震災前に住んでいた南三陸町の自然や静かな環境を「戸倉の良い所」と評価している。
2班(3年生B班)	海産物などの海の恵みを挙げる生徒が多い中、「静かな所が良い」「水がおいしいところ」など、具体的な例を挙げる生徒も見られた。今回は導入のための質問であったためこれ以上は掘り下げていないが、もう少し掘り下げていくと、大切に思っているものが見えてくるかもしれないと感じた。
3班(2年生A班)	場所や食べ物などに指定をしなかったが、自然と話題が失われたものへの過去の思い出に盛り上がりを見せた。現有するものが少ないことに戸倉の震災の被害の大きさを改めて感じた。
4班(2年生B班)	生徒からの意見は大きく3つに大分される。一つ目は戸倉の自然環境であり、緑、海（遊び）、神割崎が挙がっている。戸倉のどこという具体的な場所ではなく、生活してきた全体的な環境として、自然環境の中で暮らしたい気持ちがあると考えられる。 二つ目は、戸倉中である。校舎自体にも思い入れがあるが、景色もよく、懐かしく思っている気持ち強い。2階建てなのに「なぜかEV（バリアフリー対応と思われる）が・・・」というように、校舎の些細な思い出話でひとしきり盛り上がる。また戸倉中への登り口に「モアイ像」が一部損壊した状態で残っていたが、これを直してほしいという意見も出た。中学生の生活のほとんどは学校であり、校舎周辺の環境への思い出は、細かいところでも大切にすることがひとつの「癒し」や「復興のシンボル」にもつながるのでは、と感じられた。子供たちには、まちづくりもさることながら「学校（+周辺）の再建計画」を本格的に行ってもらってもよいのではないかと。 三つ目に、店舗があげられた。志津川市街地のサンポートを早く直してほしいという意見は、自由時間に友達や家族と楽しんだ場所であり、必ず再建してほしいと考えているのではないかと。また、戸倉地域内ではコンビニがあり、その再建を是非、という意見については、コンビニの具体名で話題が盛り上がるなど、普段の生活とも密接に関わっていたことがうかがえる。 被災前の、学校生活や遊びの環境を思い出してもらい、復興後にその回復が可能か、できないならどういった機能がまちに欲しいか、自分はどう暮らしたいか、など、「戸倉中の将来の後輩たちへ伝えたい、私たちの中学校生活」というテーマでなにか整理をしてもらおうと、大人たちにも過去の記録として感慨深いものができるのではないかと感じられた。 戸倉のなおしてほしいところとして、戸倉中を直してほしい、道路の段差を直してほしいという意見があげられた。中には、「犬塚、天女塚」という地域の集会所（またはお堂か？）を再建してほしい、という意見が出された。不便なので◎を・・・といった意見は出ず、概ね地域での生活に満足していた様子がうかがえる。
5班(1年生A班)	戸倉の良いところ、好きなところについては、やはり自然の多さや、素晴らしさを話す生徒が多かった。戸倉は山、川、海がそろっており、生徒もその素晴らしさを生徒も実感している印象を受けた。皆戸倉の豊かな自然に生まれながら成長してきた様子で、この意見は、戸倉(南三陸町)の地域の特徴をあらわす意見だったと感じた。また、住民の方が優しい方が多い等戸倉地区の住民の方の人柄について述べる生徒も多かった。
6班(1年生B班)	自分の元いた住まいのあった場所を地図上に示した上で、戸倉の良いところ、好きなところ、自慢したいところ、楽しかった思い出等を地図上に貼り出す。何を書けばよいのか戸惑っていた生徒も最初は見受けられたが、〇〇ちゃんの家でゲームをして遊んだことといった現代っ子らしい思い出もあったが、海の特定の場所（よく吟味して添付していた）に貼り「ここからの町を見た形式が良い」という海と近かった生活からの思い出を挙げる生徒もいた。また閉校した藤浜小学校を懐かしむ意見も出された。 じっくりと考えてもらうことができたわけではないが、地域の特色を意識した意見が幾つか出されたことは、戸倉への関心、懐かしむ気持ちがあるのだろう。もう少し時間をかければ、屋外の遊びの中から見出される地域の特徴を導き出すことが出来たであろう。（例えば、虫取り、磯・浜辺の遊び、果樹を取ったこと等があるのではないかと想像される。）

自らの将来については、高校卒業時に町外にでていく生徒が多く、10年後に地域に残って生活していることを想像する人は少なかった。将来の夢を語る人もいるなかで、現在の生活に追われてなのか、恥ずかしさがあるのか、将来のことを具体的に皆の前で語らない人も多かった。このような状況で、若い世代が生まれ育った地域の復興に参加していくために、どのような切り口があるのか、検討する必要がある。単に「人口の流出を防ぐ」といった視点だけではなく、若い世代の将来の夢に寄り添って、現実に即した形でできる範囲で、町の復興に関わる機会づくり、仕組みづくりが必要だと思われる。

図表 17 「将来について」の各班の意見

1班(3年生A班)	<p>高校卒業がターニングポイントで、そこからはそれぞれ別々の道を進む。現在、町外に住んでいることも影響するのか、南三陸に高校卒業後も住むと答えた生徒はいなかった。</p> <p>それぞれに、外に向って、福祉・医療・語学・大学・ペット関係・自衛隊・音楽・公務員など高校卒業後の進路をイメージしている。実家は町内にあり町には年に数回は帰ってきたと考えている生徒が多い(年に1回では少ないというのが多数だった)。</p>
2班(3年生B班)	<p>高校卒業が一つのターニングポイントと受け取っている様子をうかがえ、ここで残りたいという意思を示す生徒、出たい(出る先はまちまちにしろ)という意思を示す生徒に分かれた。</p> <p>はずかしさからか、断言する将来像は少なく、すこし控えめな表現が多く見られた。そこで、ポストイットを出して発表する際、なぜそう思うのかを、改めて聞き直し、語ってもらう中で、他の生徒からも意見が出たりと、進展した。</p>
3班(2年生A班)	<p>まず戸倉に自分達が卒業するまでは学校の再開は難しいということを生徒が話していたことが気にかかった、予想では早く修繕して戸倉中に通いたいと思っているのかと考えていたので、自分たちはこれから志中に通うことを受入れている。また、高校の卒業後は全員が南三陸町に残りたいとか、将来的に戻りたいという意見が出なかった。今回は10年後までの予想だったが、もう少し時間があれば20年後、50年後の話も聞きたかった。</p>
4班(2年生B班)	<p>10年後に戸倉にいるかいないか、という問いをした。9人中、戸倉にいると回答したのは1名だけで、理由は「実家が事業をしており、何らかの形でかかわっているだろう」という回答であった。大半は、仕事で外に出ていると回答し、戸倉にいるか判断がつかないという生徒も、仕事は外で就いているだろう、と考えている。</p> <p>ただ、「戸倉に仕事があればどうか」という問いに対しても、明確に戸倉に残ると判断材料にはならないようだった。現実的な判断が先行してイメージが湧き難かったかもしれないが、仕事を含め、様々な10年後の生活をイメージした際に、戸倉で生活しているというイメージは薄いかもしれない。</p> <p>10年後、何をしているか、という問いには戸惑いが見られた。(他班で行っているように、細かく区切った意見出しも考えたが、時間の都合で10年後の意見をそのまま出してもらった) ほぼ全員が、「何らかの形で仕事に就いている」という現実的な回答であり、何人かは仙台周辺で、などのイメージを持っている。</p> <p>復興計画には「くらし」「まち」「しごと」等のビジョンがうたわれているが、これら一つずつについて10年後どうしているか、テーマを決めて10年後のライフスタイルを描いてもらうなど、時間をかければよい意見が整理できたかもしれないと考える。</p>
5班(1年生A班)	<p>将来は、戸倉を出て大学に通う、仙台で就職する等南三陸町から離れる生徒が非常に多く、ずっと戸倉(南三陸町)で暮らすという意見が少なかったことには驚いた。ただこれも戸倉(南三陸町)の地域特性であろうと感じた。</p>
6班(1年生B班)	<p>高校を戸倉でという生徒から、仙台の親せきにおいでと言われていたので仙台にいるといった生徒まで5年後の姿も多様であった。また10年後には、約半数が戸倉に戻って海や町のために働いているということをイメージしていた。ゲームソフト開発する会社を戸倉で開いていると言った生徒もいた。</p>

図表 18 「町のこれから」についての各班の意見

どうなっていてほしいか	
1班(3年生A班)	<p>今まであった地域の資源(自然、海産物、農業、潮干狩りができる場所、気仙沼線、防波堤、お寺)などが回復してほしいと考える一方で、商業建築(イオンなどの大規模店舗、コンビニ、小売店)や病院などがほしいといった意見もだされた。また、道の駅を戸倉の端の神割崎につくり、そこまで観光客の車が通るようにして、戸倉にも観光客がきて地域経済に貢献してもらいたい、東京デイズニーランドの戸倉版があったらいいなといった意見や、高台へ移転した際に浸水域の使い方についての意見もだされた。また、同じ集落の人が集まって新しい住宅地をつくれたら良いといった意見もだされた</p>
2班(3年生B班)	<p>10年度には戸倉にいる生徒もいれば、東京に行っている生徒もいる。それぞれの立場からイメージして、どんな戸倉、どんな南三陸町になってほしいかをポストイットに記述してもらい、一人ずつ発表した。</p> <p>ここでは、仕事の再生、商店の再生など、ハードをイメージさせる解答が多く見られた。ファシリテーターとしてはもう少しふくらみのある解答をイメージしていたので意外であった。再建のイメージは、「前よりもっと良く」と、「前と同じに」のイメージに分かれた。たとえば大きなイオンを建てたい、という意見に対しては、「いや、変わらないでほしい。」という反対意見もあった。イオンを建てたいと言ったのは残りたいと意思表示をしていた男子生徒で、変わらないでほしいとコメントしたのは東京に出たい、静かなところが好きと意思表示していた女子生徒だった。出ること意識している生徒と、残ることを意識している生徒で、前出の意見の傾向があるように見受けられた。それぞれから、出したポストイットの理由を聞いていった。</p> <p>このとき、議論が生徒たちの主体性から外れつつあることが気になり、急ぎょ設問をもう一問増やし、「復興に向けて自分たちに出来るようなこと」を発表してもらった。広報やボランティアなど、近々、かつすぐにでも出来るような取組みを表すものもあれば、伝えていくこと、と先も見据えた意見も出された。</p>
3班(2年生A班)	<p>それぞれの考えに対し生徒同士で、「いやそれはここにほしい」とか「それは必要ない」という議論になっていたが、はじめは、お店やアミューズメント施設の話で盛り上がり、デイズニーランドなどといった施設まで地図に書き込まれた。しかし、ただ単にほしいものを書いてきたのかと尋ねると、観光客が呼び込めるといった考えもあつての意見も聞かれた。それから、病院は戸倉にも必要となり、それについては今回生徒たちが経験した孤立状態の対応策として将来的に必要と考えており、南三陸町に住み続けたいという気持ちと、地域への思い入れには違いがあることを感じさせられた。</p>
4班(2年生B班)	<p>10年後、戸倉とどう関わっているか</p> <p>10年後、ほぼ全員が戸倉の外で仕事に就いているという状況で、「戸倉とはどのようなかわりがあるか」、ひとつの具体イメージとして、どんな機会に帰ってくるかを記述してもらった。</p> <p>墓参りや正月、夏祭りなど、「イベント」の際に帰ってくるという意見が多く出た。墓参りではどこに行くか、地図上に墓地の場所を先生と一緒に確認してもらった。</p> <p>夏祭りについて、少し詳しい意見や思い出を意見出ししてもらった。屋上の食べ物(りんご飴、焼きそば・・・)、花火、獅子踊りなど、楽しい思い出が残っているようであった。今年も縮小規模ながら開催されたようであり、戸倉に戻るとともに本格的な再開を望む様子が見られる。</p> <p>また、「週末は少年野球の指導者として戸倉に戻ってきたい」という意見もあった。こういう人材を、例えば戸倉から離れたとしても地域につなぎとめるための方法(野球に限らず、指導者として地域に定期的にかかわる全国の出身者を募るなど)も、大人たちで考えてみてはどうか。</p> <p>戸倉を盛り上げるためにどうするか</p> <p>10年とは、震災に絡めてどういふスパンなのかを少し理解してもらうために、阪神・淡路大震災からは15年以上経つが、家や道は復興しても、人々の生活は思い通りに復興しないことを簡単に説明した(買い物に行くようになった、隣近所との交流が減った、等)。そのため、今やついている「10年後の戸倉」という議論が非常に重要である、という点を念押ししておいた。</p> <p>戸倉中での学校生活を通して、もとの地域に愛着が感じられる生徒であり、10年後、現実的には戸倉を離れて生活してであろうが、夏祭り等のイベントの機会には戸倉には戻ってきたいという気持ちを持っている。</p> <p>そこで、「イベント」をキーワードに、戸倉を全国にアピールするにはどうするか。また、夏祭りを本格再開することも含めて、南三陸がどう復興してほしいか、観光振興的な視点でのゾーニングを行った。</p> <p>まず、全国へのPRが必要ということで、町のいい点を町のブログ等で周知、という方法が出された。</p> <p>そこで町のいい点とは何か、という問いは、最初の回答にほぼ戻る。豊かな自然や、海産物がアピールポイントとなる。そこに加えて、「漁業体験」という戦略的イベントの案が出された。沿岸に宿泊し、漁業体験をし、海を楽しんでもらうというプランは、漁業復興ともうまくからめて、今後の観光振興の一手法とはならないだろうか。復興計画に提唱されている「6次産業化」にもつながると考えられる。こうした仕掛けは、戸倉地区に持たせることも可能と考えられる。</p> <p>まちの長所をアピールし、外部から人が入ってきた際には、買い物等ができる機能も必要ということで、中心市街地でおみやげ(海産物等)を購入できるような店舗の整備が必要という意見も出された。</p> <p>また、まちのキャラクターとして蛸をモチーフとした「オクトパスくん」というものがあることがわかった。「置く」と、「パス」という意味で、受験のお守り的に考えられており、これを大量生産してまちのPRにつなげれば、という意見が出された。その際、生産工場も中心部近くに作るという考えであったが、これは産業の活性化につながるほか、町の観光スポットと工場を一体整備することも考えられる。</p> <p>また、ホテル観洋のリニューアルという意見も聞かれた。もっと高級感のあるものに、という意見であり、観光を目玉事業と考えるなら一考の余地はあると考えられる。</p> <p>以上の点を踏まえ、地図上に「夏祭り会場の整備」「中心市街地で観光客が買い物(および、オクトパスくんの生産拠点)」「戸倉での漁業体験(および、観光スポットとしての神割崎)」についてゾーニングをしてもらった。</p>
5班(1年生A班)	<p>初めに戸倉に「戸倉につくるもの」、「戸倉からなくすもの」に分けることを意識してポストイットに記入してもらった作業を行った。「つくるもの」としては、学校等の公共施設、大型スーパー等の新しい建物が挙げられた。最終的に、新しく建てる建物について、具体的に議論していくと、主に映画館やモスバーガー等の皆で集まったり、遊べる施設の建設を望む声が多かった。震災の影響もあり、なかなか皆で集まって遊べる機会が少なくなっている現状を表した意見だったと思う。また、実際にどのあたりに建てるか、ポストイットを貼ってもらくと、店舗は海側に家、役場や病院等の公共施設は山手に、町側の計画像と似たような形に出来上がったのには驚いた。また、鮭が戻ってこられるような川、魚を養殖するところ等、自然環境を利用した街づくり、生活を望む声も多かった。</p> <p>「なくすもの」としてはやはりがれき、壊れている建物という意見が多かった。また、時系列については全て来年、再来年中の早期撤去を望む声であった。</p>
6班(1年生B班)	<p>1年後から10年後までの中で、戸倉に“残っていてほしいもの”“新たにできてほしいもの”“なくなってしまうもの”を色別のポストイットに記述する作業を行った。がれきや有害物質が無くなってほしいという意見は多数出された。また中学生らしくゲームセンターや特定のお店等、沢山のものが挙げられていた。また森や海等が今のまま残ってほしいこと、お祭りが残っていてほしい等、戸倉の特徴的な空間や行事に対する思いが強いことが改めて感じられた。</p> <p>更に、出された意見に対して、1. の作業で出されたことを思い出しながら、これは良いアイデアだ、というものに投票をした。最多の得票は“物産品”で4票を獲得。また“心”にも2票の投票があったことが印象的である。</p> <p>物産品とは何かと聞くと、海産物が多数挙げられた。ではそれが10年後に盛んに提供されるようになるためにはどうしたらいいかと聞くと、山や海をきれいにすることといったことが挙げられた。“のり”についての学習を行っている成果かもしれない。</p> <p>また、“われらの心”という意見が挙げられた。自分達の心が、海産物を育てるのだという、本質的なことを挙げることでできていた。</p>



まちの復興イメージについて、10年後も町に留まると答えた生徒が、「人々の深い絆や温かさはそのままが良いが、便利で若い世代が必要とする店舗などの商業施設等が必要」と考える傾向が強いのに対し、10年後には町を出ているだろうと答えた生徒は「震災前と変わらない、そのままのまちがいい」と答える傾向が強かった。

図表19 各班のファシリテーターの所感

ファシリテーター所感	
1班(3年生A班)	<p>既に町外に住んでいて、町外の中学校に通っているため、被災地をみる機会が少なく、「戸倉の良い所」という話には意見がたくさんでたものの、「どんな町になったらよいか」や、「将来自分がどこに住んでいるのか」といった質問に答えるには時間がかかった。</p> <p>将来どこに住むか具体的にはわからないが、少なくとも高校卒業後は町に住むという気持ちは薄いように感じられる。</p> <p>しかし、戸倉地域が大好きなのはかわりない。若い世代のそういった、自分の居場所、ふるさとと積極的にかかわれる、きっかけづくりや環境づくりが大切だと実感した。</p>
2班(3年生B班)	<p>残ることを意識している生徒と、出ることを意識している生徒で、将来何をしているか、以外の質問でも関連して差があるように感じられた。残る生徒は、「高校卒業した後の事も考えて、まずは仕事再建。そこで暮らすことも考えて、立派なスーパーマーケットが必要。」と回答から様子がかえるように、自分が今後も直面する問題として主体的に捉えているように感じた。対して、出る生徒は「私は出るけど、戻ってきたときに、ふるさととしてあまり劇的に変わらないでほしい。」と、ノスタルジーを感じさせる、客観的な問題意識であるように伺えた。語り継いでいきたい、と発言したのも、後者の出る生徒である。</p> <p>私は、何も客観的に捉えている生徒が残りたいというような主体性を得るまでの変化は導き出せなくても(そうすることすら良いかはわからない)、離れた視点から今後も南三陸の復興まちづくりに長く関わってもらえる人材となるとしたら、それは大きな資源だと感じた。</p>
3班(2年生A班)	<p>南三陸町で将来生活したいという生徒が無く、どのように話を進めたらいいか困惑したが、将来の南三陸の地図作りを通じて、こんな町を作ることができれば3班の生徒たちも南三陸に戻ってきたいと思えるのかと考えると、将来の南三陸町を担う若者のためにも今後のまちづくりには、若い世代の意見に十分耳を傾け、反映させる機会と仕組みが必要であることを感じました。</p>
4班(2年生B班)	<p>中学生なので、現実的な大人の意見と、夢を持った子供の意見が混在すると考えていたが、やはり将来を見据えると現実的に、仕事のために戸倉にはいないであろうという意見を踏まえ、「外部から人を呼んで、楽しんでもらう南三陸」をテーマに検討を進めた。</p> <p>戸倉に強い愛着を持っている生徒たちだったので、ディズニーランドのような新しい施設に頼らず、自然や漁業など、「戸倉の生活」をアピールすることに気持ちが向いた。地方振興では、外からの資金注入等のカンフル剤が有効に働くこともあり得るが、地域の歴史的経緯を踏まえると、地域固有のものをどう活用するか、アイデアを絞ることがより重要であり、その意味では子供たちの意見は観光戦略としてベースになりうると考えられる。ぜひ、地域の大人(漁師や民宿、ホテル等)も交えて、具体的なパッケージプランを練ってみてはどうかと思う。</p> <p>また、当面の課題として、たとえ自分たちが卒業するとはいえ、学校は生徒たちにとって重要な生活の場である。「まちづくり」は地域の課題であり、そのため地域住民が意見を出して考えるべきものであるが、「学校づくり」を生徒たちの課題として具体的に考えてもらってはどうか。少なくとも、今の3年生が卒業するまでの間に、戸倉中に戻って「1日体験帰校」のイベントを行う、卒業式は戸倉中で行う等、地域住民と協力して、子供たちが「復興のために自分たちも頑張った」と思える機会を検討してみしてほしい。</p>
5班(1年生A班)	<p>最初は緊張しているか、なかなかポストイットに手が進まなかったが、戸倉にどのような建物を建てたいかを考える時には、皆の素直な意見が多く聞かれた。震災から半年程度しか時間が経っていないこともあってか、将来どのような町にするかというよりも、今すぐ何が欲しいという観点での意見が多かった。だが、その中でも震災で残った建物を残してほしい、震災を後世に伝えるような公園、今回のような津波が来ても負けないような防潮堤の整備等中学1年生とは思えないような意見も多数出た。また、改めて戸倉(南三陸町)と豊かな自然のつながりの大きさを改めて感じた。今後街づくりを進める上で将来を担う世代と意見交換をすることができ、非常に有意義な時間となった。</p>
6班(1年生B班)	<p>事前に、先生からよく意見は出せるけど、書くのは苦手かもしれないのご指摘をいただいていた。確かに最初のうちはポストイットにペンを走らせることを躊躇する姿が見られたが、後半には、大変多くの意見を書くことができた。</p> <p>今回は十分に“議論”する時間をとることができなかったが、友達の見意見をみて驚嘆したり、頷いたりする姿が見られた。友達がどんなことを考えているのかわかる大変興味を示したようである。</p> <p>最終的には既に取り組んでいる学習(のり)への関心が高かったことを鑑みると、これからの中学校での学習過程の中で、常に戸倉を意識した学習内蔵を、教科書の内容に合わせて取り入れていくことが、とても重要であろう。時折それらのことを振り返る機会を持つことで、遠く離れた場所においても、戸倉への理解や愛着を持ち続けるきっかけとなる。海から山までが一つの繋がった空間であり、一体として考えるべきことに気が付いている生徒もいたことは印象的である。中学生になれば、物事の因果関係を、体系的に理解することのできる生徒が増える。そういった物事の繋がりについて、他の地域での事例も含めながら学ぶことで、本当の意味で将来の戸倉を担う大切な人材が育成されることとなる。</p> <p>また、今回は意見を出すことが中心の進め方となったが、今後は折に触れ、友達の出した意見を育て発展させるための時間を持つことが大切であろう。今回の様子を見ていると時間さえあれば、それが十分にできる素質を持っていることを感じた。一つの意見について、その背景や発展性を皆で調べたり、考えたりすることを積み重ねることで、将来戸倉の町に、良い議論のできる大人が増えることであろう。</p>

## (2)第二回授業 カードゲーム（クロスロード）を使った議論

### ①概要

- 実施 : 戸倉中学校の総合学習の時間 授業  
日時 : 平成 23 年 10 月 16 日 PM1:30~3:20  
場所 : 南三陸町立戸倉中学校仮校舎 (元善王寺小学校 登米市内)  
参加者 : 中学校生徒 3 年生 20 名 教員 2 名 (吉田先生、若生先生)  
人と防災未来センター 石川  
実施体制 : 前回のワークショップの班に分かれる (2 班)

### ② 内容

- ステップ 1 : 奥尻や中越等、復興まちづくりの事例学習  
自分達の地域との共通課題は何か? 実際の復興の道のりをたどる
- ステップ 2 : 復興過程のジレンマ。カードゲームから本音の議論  
(オリジナルの質問: あえて極端な質問で投げかける)  
生まれ育った町は大好きだけど、高校を卒業したら都会に行きたい。  
震災前とかわらない戸倉に。でも、若い世代に魅力的なまちに。。
- ステップ 3 : ワークシートでふりかえり  
かなり本音の議論になったので、自分の意見をもう一回考えてみる

#### ※クロスロードゲームとは

「クロスロード」とは、「岐路」、「分かれ道」のこと。災害対応は、ジレンマを伴う重大な決断の連続である。「人数分用意できない緊急食料をそれでも配るか」、「学校教育の早期再開を犠牲にしても学校用地に仮設住宅を建てるか」、「事後に面倒が発生するかもしれないが、瓦礫処理を急ぐため分別せずに収集するか」など。「クロスロード (神戸編・一般編)」の素材は、95 年の阪神大震災の際、神戸市職員が実際に迫られた難しい判断状況をもとに作成されている。さらに、「事前の耐震工事を優先するのか、事後の住宅再建補助を充実させるのか」や「ボランティアに行くか、義捐金を送るか」といった一般市民向けにも活用できる課題も盛り込まれている。

トランプ大のカードを利用した手軽なグループゲームながら、参加者は、災害対応を自らの問題としてアクティブに考えることができ、かつ、自分とは異なる意見・価値観の存在への気づきも得られる。自治体の異なる部署に勤める方々、あるいは、自治体職員と地域住民とが一緒にゲームに参加すれば、地域の防災問題に関して、事前に合意を形成しておく助けとなる。



「問題カード」と「イエス・ノーカード」



勝者が獲得する座布団

<p><b>食料担当の職員</b></p> <p>被災から数時間、避難所には3000人が避難しているとの確かな情報が得られた。現時点で確保できた食料は2000食。以降の見通しは、今のところなし。</p> <p>まず 2000食を配る？</p> <p>Yes (配る) OR No (配らない)</p>
--

写真15 クロスロードゲーム

① 他被災地の被害と復興について（説明スライドは資料4に掲載）

主に集落復興や集団移転の事例について、北海道南西沖地震や新潟県中越地震の例をもとに、中長期的な視点で復興の課題を考えることの大切さについて説明した。

奥尻島の津波災害の被害からの復興や、人口が減少していく地域の復興については管新が高いように感じられた。

北海道南西沖地震→・夜間の津波被害と高台移転&現地盛土による復興まちづくり（奥尻島）

- ・バブル期に高額な公共投資をした島の現在の様子、漁業・観光
- ・津波被害とメモリアル

新潟県中越地震→・集落復興と住民による地域活性化の活動

- ・若い復興支援員達の奮闘や被災地外との交流
- ・多くの集団移転とコミュニティの崩壊・継続
- ・地域の伝統行事を掘り起こし・絆をつなげるとりくみ
- ・地域に合う住まい「中山間モデル住宅」
- ・復興と人口減少 山古志村や川口町の集落復興

阪神・淡路大震災→・多くのまちづくり協議会など市民の手で考えた復興まちづくり

- ・高齢者や障がい者など、避難生活や復興で困ったこと、工夫したこと
- ・17年後の今も続く、被災地での活動、ボランティア

## ②クロスロードゲームを使ったグループワーク

クロスロードゲームを利用して、復興過程において若い世代が感じているジレンマに着目して議論した。具体的には、①自らの将来の夢と地域への愛着やまちづくりへの参加の間での葛藤や、②利便性を求めることと今までの地域の良さを残すことのバランスなどについて話し合った。市町村の復興計画策定プロセスでは、結果的に高齢者の意見をきくことが多くなるが、本研究では、人口流動の鍵を握る若い世代や子育て世代の率直な考えを知ることができるプログラムづくりを目指した。

クロスロード質問1 あなたは高校3年生です。両親が「町に残って、地域の復興の力になるべきだ」といいます。町に残りますか？

### A班 (Yes1名, No6名)

No「協力したいけど、自分のやりたいことがあるし。悩むよね」  
No「自分の夢の職業に就いてから、ボランティアでくれれば良い」  
No「何もないし、津波があるから、住むのは嫌だ。」  
No「親に決められたくない。束縛ムリ」  
Yes「年寄りに復興は無理なので、高校あがりの若い力が必要だから、エンジニアになりたい。」



### B班 (No1名, 他はYes)

Yes「お兄ちゃんは帰ってこないから、家に残るべきじゃないから。」  
Yes「家あるし。残れるし。長男だし。」  
Yes「絶対、親はこんなこと言わないと思う。好きなことやれって。」  
Yes「親に言われたらYESかな。今まで言ってきた町だし。」  
No「町に残って、病院・郵便局・漁港をつくる。高台へ移転させる。」

### C班 (Yes4名, No3名)

Yes「全員NOだと、若い人が誰もいなくなり、やる人がいないから。」  
Yes「そこで言った人でないと、もとの風景がわからないから、やらねば」  
No「まちの復興は、残らなくても町の外からでもできると思ったから。隣市から車で通えば、がれきを片づけたり、まちの計画を考えられる。」

図表16 質問1に関する議論

東日本大震災が発生しなかったとしても、若い世代が地方から都市部への転居する傾向は強い。ただ、災害は地域の課題の進行を加速させたり、顕在化させたりするので、十代の若者にとっては身近なこの質問は、沿岸市町村の復興を考える上で、こういった本音の部分をつまみながら、地域復興を考えていくことが重要だと思われる。生徒さんは、自分の将来像や夢と、家族・地域・津波からの安全性などの間で葛藤があり、答えを模索しているようにみえた。実際、授業の最後に配布した振り返りシートには「この質問は迷った。実際に親から言われたら悩むと思う。」「すごく悩んだけど、自分のやりたいことのためには、仕方がないかなと思った」といった意見があった。

クロスロード質問2 あなたは35歳で、7歳の子供がいる会社員のお父さんです。戸倉の漁村で被災し家は全壊しました。登米市内の仮設住宅に住んでいます。戸倉地区の集落を全部なくして、全員まとまって高台に移転したら、近くにスーパーやコンビニやレンタルビデオなどの店や診療所などの医療施設がある商業センターが近くできるとききました。でも、集落や漁港や自然はもとは全然違うものになりそうです。その案に賛成しますか？



A班 (Yes5名, No2名)

「この質問、めっちゃむずかしい」  
 Yes「被災を機に便利で住み易く、だんだん慣れるはず。医療施設欲しい」  
 No「(人間発すると)維持できない。神った環境で育つ子は津波が再来しても」からまちをつくる方がない」  
 No「自分の老後のんびり暮らし環境」  
 No「高齢者は前の感じが悪いから」  
 「山の外に出るなら、そこそこ築えて、海がなくて、のんびり出来る所が良い」

B班

Yes「子供がいるなら便利なほうがいい。過去ばかり見ていては前にすすめない」  
 No「集落を全て統合するのは、賭け事的。」  
 No「地区内に商業センターをつくっても、少子高齢化で、つぶれてしまうのではないか」  
 No「集落を全て統合するのは、賭け事的。」  
 「おまをやっている人は無理。非だしするから」  
 「登米、山のように、コゼエことが増えたよね」

C班 (Yes2名, No5名)

Yes「子供の安全を守る責任がある」  
 No「戸倉のよさは田舎であること。原形がなくなる。利便性を求める人は、都市に住めばいい。そんなところは、どこにでもある」  
 No「高台移転には賛成。でも、スーパーやコンビニが建つかず、地域が全滅寂滅のようになってしまふのは、バカモノ」  
 「おまをこころなことは、若くていないでいい」  
 この質問自体、ありえない。(A班)

図表17 質問2に関する議論

高台への集団移転に関して、利便性や安全性と、集落の空間の記憶や人のつながりなどを維持することとの間で、何を重視することが、特に若い世代にとって重要であるのか、議論した。

中学校側と事前にプログラムについて相談した際に、「まちづくりの具体的な話は、極端なくらいの質問でないとイメージがわきにくいし議論しにくい」とアドバイスをいただいたので、質問文も若干過激な内容になっている。実際、図表20のA君のように、質問文に対して違和感を持つ人が熱く意見を発表するといったことも起きた。クロスロードは質問を実施者がオリジナルで作成することができるので、プログラムを実施する場合は、担当教員と良く話し合いながらプログラムをつくり必要がある。授業後の振り返りの意見からは、「A君の意見が印象に残った。熱くなりながらも、とてもよい意見を発表していた。」「Yes Noを出し合って、みんなの意見が聞けた。みんな真剣に考えていて、真面目に発言しているのが印象に残った」といった意見がでた。

### ③ 生徒の感想と分析（終了後 生徒が記入したワークシートの分析）

1) 今日の話や、クロスロードゲームで、一番印象に残ったことは何ですか。それはなぜですか？

#### 【他の災害の復興事例】

- ・新潟県中越地震の話聞いて、南三陸町は地震だけでどのくらいの被害があったのかが気になりました。
- ・復興で津波が来た所は資料が少なくなる。四川では町一つ資料になった（震災遺跡）。
- ・建物を建てすぎて維持できなくなった。復興だからといって建てすぎはよくないんだと思ったから。（奥尻島の事例）
- ・他の被災地の被害と復興について。これからの南三陸町の復興にいいことなんじゃないかと思ったから。
- ・他の被災地の被害が私達の町とあまり変わらない事が分かったし、クロスロードゲームで自治会長の気持ちになって話し合いができたのでよかったです。
- ・ほかの人が、南三陸や戸倉について、いろいろ考えているんだなあと思った。
- ・北海道南西沖地震の話です。バブル期で景気が良いということもあり、施設などがちゃんとできたけど、その後の施設の維持などが大変ということが一番印象に残っています。
- ・他の地域の震災からの復興への様子ももっと詳しく知りたいです。

#### 【カードゲーム 質問2】

- ・質問2のあなたは高校3年生です。両親が「町に残って、地域の復興の力になるべきだ」といいます。町に残りますか？の質問。理由は一番迷ったから。
- ・高校3年で親にもし本当に「残れ」と言われたら、すごく悩むだろうと思いました。
- ・質問2が難しかった。町の復興にたずさわりたいとは思いますが、やはり残りたくない気持ちもある。
- ・質問2の質問が一番難しかったです。すごく悩んだけど、自分のやりたい事をするためには、仕方がないかと思いました。

### 【カードゲーム 質問3】

- ・A君の高台についての意見 熱くなりながらとてもよい意見を発表していたからです。
- ・質問3（高台移転の質問）は、集落に住んでいた人達をバカにしていると思います。まあ、役場の人達も同じ南三陸町民だと思うので、そんなこと考えないと思いますが。
- ・A君の話がとても印象にのこりました。みんなで Yes、No でだし合って、みんなの意見がきけた。
- ・質問3が一番印象に残りました。この問題は、未来にかかわる大事なものだったからです。質問2 正直残りたくはないです。地元には残らず、違う所に住み、自分の夢をかなえてから復興の手伝いをしたいです。
- ・みんな真剣にかんがえていたこと。他の人もまじめに発言していた。

2) 10年後の自分は、<どこで>、<どんな暮らし（仕事など）>をしたいと思いますか？

### 【南三陸町での暮らし】

- ・多分、南三陸町に居て消防士になっていると思います。
- ・私は家が残っているので、南三陸町で暮らしていけるとと思います。何の仕事をしているかはよくわかりません。
- ・南三陸町で漁業関係の仕事をして、安全な所で暮らしている。
- ・どんな仕事をしているかは分からないけど、南三陸町で働いていると思う。
- ・地元に住んでいて、仕事をしている。
- ・おそらく、南三陸町でふつうに暮らしていると思う。
- ・たぶん10年後は戸倉に残っていると思います。自分の生まれ育った町に残っている復興まちづくりをしているかと思います。
- ・たぶん地元で、普通に仕事して働いているだろう。

### 【南三陸町外での暮らし】

- ・北海道か沖縄の小さな町で役場職員として働いている。

- 10年後は、介護士になって働いていると思う。
- 都会のほうで、自立して暮らしていると思います。
- 戸倉じゃない所でアパート暮らし
- 東京で、自分の夢をかなえるために大学へ通いながら友達と仲良く過ごしているのではないかと…。
- 海上自衛隊の護衛艦の乗組員になっているか、陸上自衛隊の宮城県内の駐屯地で仕事していると思う。
- 仙台あたりで仕事をしていると思う。でも何の仕事かわからない。
- どこで…不明。どんな…普通の。
- 多分、戸倉の近くの町か、登米か、石巻に住んでいて、腕のいいエンジニアを目指してる。
- どんな仕事をしているかは、まだ良くわからないけど、戸倉にはいないと思います。
- 10年後の自分は、都会で生活をしていると思います。たぶん、自分のしたいことができ、充実した毎日がおくれていると思います。
- 都会のほうで暮らしていると思います。どんな仕事をしているかは、想像できないけど、ちゃんと働いていると思います。

3) 10年後、戸倉・南三陸町とどんなふうに関係がつながっていると思いますか。

**【南三陸町内でつながる】**

- 漁業と自然豊かな地区という、つながりがあると思います。
- いっしょに復興に向けて頑張っている。
- 親がいるから実家
- 普通に戸倉に住んでいると思う。
- 住民
- エンジニアとして復興にたずさわっている。



- たぶん 10 年後は今と変わらず、関係はいい感じになっているのかと思います。
- 若い私達がひっぱっていきたい。

**【南三陸町外からつながる】**

- 年に 1 回位行くと思う。(お盆などに)
- しっかりとした町になっている。
- 故郷
- 観光客が多く来ていて、町がにぎやかになる。
- お墓まいり。地元として。ボランティア活動で。
- 自分の親やばあちゃんなどは戸倉に住んでいると思う。休暇には必ず戸倉に行ってみる。
- おぼんやおひがんにお墓参りに行く。
- お墓まいりには、行くと思います。ボランティア活動などにも積極的に参加していきたいと思います。
- 復興について考えあっている関係
- かなり大事な関係になっていると思う。
- 都会に出て行っていると思うので、あんまり関係がないと思う。
- 都会に住んでいる予定なので、たまに実家に帰ってくるくらいだと思います。でも、この体験は伝えていると思います。

4) これからの町の復興について、知りたい・調べたい、やってみたいと思うことは何ですか

**【まちづくりの情報】**

- 町の意見と町民の意見について
- 志津川の復興計画（歌津城などもふくめ）
- どこに高台つくるのか。南三陸町はどうなるか。

- ・今どういう風に話が進んでいるか
- ・やってみたいこと…地域の人達の意見をふまえて、復興を進めていきたいです。
- ・戸倉の農業をやっていた被災者の農地土地の確保について
- ・戸倉中はどうなるのか？
- ・どこに家を建てるか
- ・どういう計画を立てているかを調べたい
- ・町の復興計画についてのさらに詳しい情報
- ・いつ町がもとどおりになるのか知りたい。
- ・いつになったら防波堤ができるのか？
- ・どんな計画で何年くらいかけて町を復興させていく予定なのかを詳しく知りたい。

#### 【人が戻ってくるか】

- ・これから南三陸町に人がもどるかどうか

#### 【ボランティア活動など】

- ・ボランティア活動を積極的にやってみたい。
- ・やっぱりみんなでボランティア活動をしたりしてみたい。
- ・やってみたいと思うことはボランティア活動です。いろんな人にお世話になった分、私も誰かの力になれたらと思います。

#### 【その他】

- ・思い浮かばない
- ・町以外の人に町の情報をつたえていきたいです。

5) 今、一番したいことはなんですか。今、一番心配なことは何ですか。

#### 【受験 将来】

- ・受験
- ・どこに住むのか…心配。高校へ受かるか心配。カラオケしたいです。一日中ごろ寝し

て、のんびりとした日を過ごしたい。夢をかなえたい！

- ゼーダガンダム（PS2）。受験やその後の自分の道です。
- 心配なこと…受験が不安。世の中。したいこと…ギグアンに会いたい♡

#### 【余震や津波】

- 地震が多いから、また大きい地震が来るんじゃないかと心配になる。
- また大きな地震がこないか心配
- 津波がまたこないか
- 自分は作ることができないが、防波堤を作って欲しい。（また近いうち津波が来たらだめだから）
- 町に若い人がいなくなるんじゃないか。また津波がくるんじゃないか。

#### 【暮らし】

- 震災前と同じような生活をしたい
- 家がほしい。地震。戸倉が変わってしまわないか。
- 南三陸町のふっこう？南三陸の住民たちの住むところ、建物、お店。
- 普通の家に住む。将来のお金 物資とかなくなるから。

#### 【その他】

- 特になし
- 外灯をつけてほしい。コンビニを近くにつくってほしい。道路の凸凹をなくしてほしい。
- 戸倉の方は電気がほとんどなくて、暗いから電気をつけたいです。

### (3) 第三回授業 中越視察の事前学習とまちづくりの検討2

#### ①概要

- 実施 : 戸倉中学校の総合学習の時間 授業  
日時 : 平成24年2月28日 AM10:30~12:05  
場所 : 南三陸町立戸倉中学校仮校舎 (元善王寺小学校 登米市内)  
参加者 : 中学校生徒 3年生 20名 教員2名 (吉田先生、若生先生)  
人と防災未来センター 石川  
実施体制 : 全体説明のあと、前回のワークショップの班に分かれる (2班)

#### ②内容

新潟県中越地震被災地視察を前に、地震の概要や、山古志の集落の復興について、中山間モデル住宅や公営住宅等について、また、阪神・淡路大震災の復興の特徴とどのように違うか等について説明した。視察地が豪雪地帯のため、事前の学習をして、雪に埋もれている部分も想像力を働かせてもらう必要があった。

その後、第一回授業 (全校ワークショップ) の3年生の班分け (2班) になり、これまでの授業等で考えたアイデア等を、戸倉地区の地図の模造紙に付け加えていく作業をした。



図表18 復興地図づくり (2) 1班

#### (4)新潟県中越地震被災地視察とまちづくりの検討3

##### ①概要

実施 : 戸倉中学校の総合学習の時間 授業  
日時 : 平成24年3月3日～4日  
場所 : 南三陸町立戸倉中学校仮校舎 (元善王寺小学校 登米市内)  
参加者 : 中学校生徒 3年生 19名 教員1名 (若生先生)  
人と防災未来センター 石川  
実施体制 : ワークショップについては2班に分かれる

##### ② 内容

新潟県中越地震の被災地である旧山古志村 (現長岡市山古志) の復興を中心に、①復興に関わった関係者の講話、②集落移転地や公営住宅等の視察、③メモリアル施設の見学、④中越と戸倉地区の復興まちづくりに関するワークショップを行った

- ステップ1 : 集落の復興をたずさわった方にお話を聞こう！  
自分達の地域との共通課題は何か？実際の復興の道のりをたどる
- ステップ2 : 集落移転や戸建復興住宅を見学しよう  
もとの集落を見下ろせる高台に移った集落。地元の木材を使用して建てられた一戸建のモデル住宅や長屋式公営住宅。みて、感じて、議論して。
- ステップ3 : 中越の復興で大切だったことをもとに、戸倉のまちづくりについて再度考えてみる



写真18 長岡震災アーカイブセンター見学



写真19 山古志の復興に関する講話

### ③中越視察のスケジュール

視察スケジュールを図表 2 4 のとおりである。

図表 2 4 中越視察スケジュール

時間	内容	場所	備考
<b>3月3日(土)</b>			
南三陸町出発	生徒、引率の教員	町内戸倉地区	
お昼前後到着	山古志会館 (旧村役場となり)		
13:00~30	DVD鑑賞	同上	
13:30 ~15:30	齋藤さん講話(元山古志村役場職員) 井上さん講話(山古志支援センター職員)	同上 まちづくりにかかわった方々などから、当時の話をお聞きする。 質問や意見交換	概要説明の後に、意見交換など
15:30 ~16:30	現地見学 1時間~1時間半	楯木(集団移転団地)、 木造戸建公営住宅 (中山間モデル住宅内部見学) 種苧原のアルパカ飼育舎 (地域活性化のために設立、株式会社として運営)	バスにて現地一周
17:00	あまやち会館到着	種苧原あまやち会館 住所:長岡市山古志種苧原	
18:30~21:00	ワークシート記入 (昨日の振り返り)	視察してきた内容を取りまとめ、戸倉地区の復興まちづくりを考える	
22:00	就寝		大浴場あり
<b>3月4日(日)</b>			
7:00	起床		
9:00	出発	集合住宅型公営住宅を外から見学	
10:00 到着	施設見学など	長岡震災アーカイブセンター しろくみらい館	
12:30 出発		一路南三陸へ	

#### ④視察の様子



写真 2 3 写真 2 4 復興公営住宅 中山間モデル住宅見学



写真 2 5 写真 2 6 元居住地（右）を見下ろす高台に建てられた「天空の郷（左）」

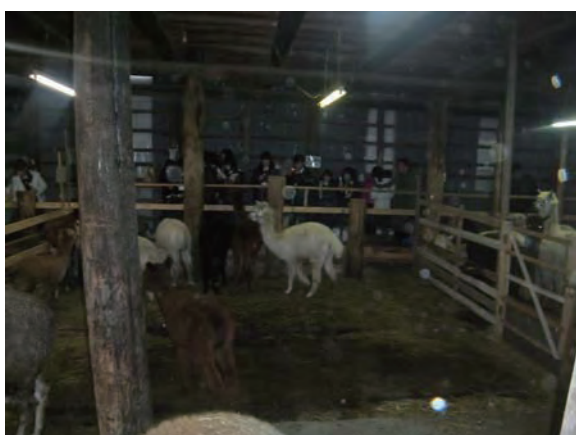


写真 2 7 アルパカ飼育（地域の株式会社）

写真 2 8 とりまとめワークショップ

⑤視察を通して復興について考えたこと

図表 2 5 山古志の復興公営住宅を見学して感じたこと

地震対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地震のことも考えて丈夫なつくりになっていて山古志に合った住宅のデザインでよかった</li> <li>・地震に備えてあるので、普通の家より頑丈そうできれいだった。</li> </ul>
雪対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豪雪の対策などもしっかりとされていて感心した。</li> <li>・一階部分は、雪でうまってもいいように、駐車スペースにしている（とくになにも置いていない）。・雪が入らないように、窓際に板をうっている。木ばかり使っているが、木独特のぬくもりがある。少ない暖ぼうで、家全体を暖められる。</li> </ul>
風景・環境への配慮	<ul style="list-style-type: none"> <li>・山古志に合った住宅のデザインでよかった</li> <li>・風景と合うようなデザインにされている。環境など（豪雪）に合った建物になっている。</li> <li>・とても立派だったし、山古志の風景になじんでいた</li> </ul>
木	<ul style="list-style-type: none"> <li>・村の木を利用して家を建てていた。お金をあまり使っていない</li> <li>・すごく立派だったし、木の感じがよかった</li> <li>・全て木で、温かそう。豪雪の対策などもしっかりとされていて感心した。</li> <li>・自分の県（新潟の）で育てたスギの木を使って作っている。</li> </ul>
お金	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お金をかけずに、しっかりと物をつくっていて、とてもいいと感じた。</li> </ul>
立派・きれい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家はやはり大広間見たいな所があった方が良く、大きいものが多い。モデルハウスは普通に立っている公営住宅に比べて小さい</li> <li>・すごくきれいだっし、住みやすそうだった。</li> <li>・すごくきれいで、使いやすいデザインになっていた。8・とても立派だったし、山古志の風景になじんでいた</li> <li>・すごく立派だったし、木の感じがよかった</li> </ul>
住みやすさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・使いやすいデザインになっていた。生活してからの事もきちんと考えられていて、工夫されていた。</li> <li>・普通の家のような感じで住みやすそうだった。</li> </ul>
人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・隣の家の人ともコミュニケーションがとりやすそうだった</li> <li>・住む人の事だけではなく、他の人達の事もしっかりと考えて作られていたので、おどろいた。</li> <li>・住民がなるべく近所の人と触れ合えるようになっていて、さみしい思いをしないとった。</li> <li>・家々がつながっていて、音とかいろいろ問題があると思いましたが、逆に近すぎる分、となりの人との交流などがふかまって、特に災害の後できたものなので、防災意識が高まりそう。</li> </ul>
希望・要望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公営住宅を見学して、ぜひ南三陸町にもそのような住宅を作ってくれたらいいなと思いました。</li> </ul>



図表26 戸倉での住宅（自力再建・復興公営住宅）のデザインや立地

高台・地震に強い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高台で地震に強い住宅 ・自然を壊さずに移れる高台</li> <li>・戸倉は海が近いので、潮風に強くて、くさりにくくて、がんじょうな家がいいと思います。戸倉の木などを使った家がいいと思います。</li> <li>・場所は津波こないような高台で家は山古志みたいに木がいいと思う。あと地震に強い家にしたらいと思う。</li> <li>・それぞれの集落の高台に、集団移転するのがいいと思う。</li> <li>・場所はゴルフ場あとや、その他にも、戸倉は山が多いので、そこを利用したりする。地盤が弱い可能性もあるので、土台はがっしりと。</li> <li>・津波があったので、高い地域（山）谷の深いところ。</li> <li>・場所は海で働く人は、十分に安全性を確かめてから、海の近くに作り、海で働かなければ、できるだけ高い所に家を作ると良いと思う。</li> <li>・やっぱり前とだいたい同じようなデザインがいいと思うし、高台に建てたい</li> </ul>
雪対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴルフ場で、山古志の復興住宅のモデルのように戸倉のスギの木を使って、家などをつくったほうがいい。吹き抜けの家を作って暖房一つでも暖まるような家</li> <li>・地盤が弱い可能性もあるので、土台はがっしりと、住宅は、2階建てにして、風通しがよくして、断熱材も入れる。（盆地も多いので、夏は暑い）。形式は一戸建て</li> </ul>
吹き抜け	<ul style="list-style-type: none"> <li>・吹き抜けの家は戸倉でも役に立つと思う。たくさん生えているスギの木を使う。</li> <li>・吹き抜け。戸倉の杉などの木を使った家。</li> <li>・ゴルフ場で、山古志の復興住宅のモデルのように戸倉のスギの木を使って、家などをつくったほうがいい。吹き抜けの家を作って暖房一つでも暖まるような家</li> </ul>
お金	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お金をなるべくかけないように、一人世帯に一階だけの復興公営住宅を作ったり、多人数の家族は二階ぐらいの復興公営住宅をつくる必要があると思う。</li> </ul>
以前同様	<ul style="list-style-type: none"> <li>・元の集落のままがいい。 ・やっぱり前とだいたい同じようなデザインがいいと</li> </ul>
住みやすさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者や障害者に優しく、便利な家で、海の仕事をする人は、なるべく近いようにする。</li> <li>・戸倉にあったような普通の家で、買い物する場所や病院などが近いところ。</li> <li>・一人世帯に一階だけの復興公営住宅を作ったり、多人数の家族は二階ぐらいの復興公営住宅をつくる必要があると思う。場所は海で働く人は、十分に安全性を確かめてから、海の近くに作り、海で働かなければ、できるだけ高い所に家を作ると良いと思う。</li> </ul>
木	<ul style="list-style-type: none"> <li>・戸倉の木を使って、高い所に家を建てる。高齢者の話をする所をつくる。</li> <li>・ゴルフ場で、山古志の復興住宅のモデルのように戸倉のスギの木を使って、家などをつくったほうがいい。 ・家は山古志みたいに木がいいと思う。</li> <li>・戸倉は海も山もあるから、木材を使った温かみのある清そなデザインが合うと思う。</li> <li>・鉄を（金属）つかいすぎるとさびる。木などがいい。</li> </ul>
風景・環境への配慮	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各集落には、一戸建てや平屋のような形式で、町の雰囲気にあった、デザインの住宅を作った方が良い。</li> <li>・戸倉は海も山もあるから、木材を使った温かみのある清そなデザインが合うと思う。</li> </ul>
一戸建て	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各集落には、一戸建てや平屋のような形式で、町の雰囲気にあった、デザインの住宅を作った方が良い。 ・一戸建て、または長屋的な感じがいいと思う。</li> </ul>

図表27 山古志の集落の復興で印象に残ったこと

すすめ方・姿勢・きもち	<ul style="list-style-type: none"> <li>・希望を持たせてやっていった</li> <li>・山古志の木を使い家を建てていた。自然のきびしさを、自分たちでかいてきにし復興するのにあまりではないけど時間をかけていなかった。</li> <li>・国の方針には従わず、自分達で方針を定めた。震災前と同じ場所にほとんど家を再建した⇒99%。元に戻す→復旧、新たに再建する→復興。地域など行事等をやることで、いろいろなものがみえてくる。震災後は、外から多くの人に来てくれるようになり、直売所が増えた。村全体で来客を温かくむかえる。地震前よりも住みやす</li> <li>・一人一人が復興に向けて、自分ができることを頑張っている。山古志への思い。復興と復旧の違い</li> <li>・住民達にいつまでに「このことをやる」と目標を立てて希望をもたせていたところが印象的だった。仮設住宅にいる間に土いじりやこいの世話などをしたことで希望をもたせたこと。今、戸倉の仮説などにいる人は暇でしようがないといていたので、土いじりなどを取り入れてストレス解消してほしいと思った。</li> <li>・「復興」と「復旧」の違いについて。みんなで集まって何かをすることが、将来について考える事につながるということ。</li> </ul>
木	<ul style="list-style-type: none"> <li>・山古志の木を使い家を建てていた。自然のきびしさを、自分たちでかいてきにしていった。復興するのにあまりではないけど時間をかけていなかった。</li> </ul>
自然	<ul style="list-style-type: none"> <li>・山古志の木を使い家を建てていた。自然のきびしさを、自分たちでかいてきにし復興するのにあまりではないけど時間をかけていなかった。</li> <li>・山古志の特徴である豪雪地帯であることから、一階の下に車庫や物置が設置されており、その地域の特徴をつかんだ復興が大事であると思った。</li> </ul>
復旧・復興	<ul style="list-style-type: none"> <li>・復興と復旧の違いについて。山古志の文化や伝統について</li> <li>・復興と復旧の違い。住民の人たちの山古志への深い愛情</li> <li>・「復興」と「復旧」の違いについて。みんなで集まって何かをすることが、将来について考える事につながるということ。</li> </ul>
人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住民の人たちの団結力の強さ（集団移転）。</li> <li>・仮設住宅にいる間に土いじりやこいの世話などをしたことで希望をもたせたこと。今、戸倉の仮説などにいる人は暇でしようがないといていたので、土いじりなどを取り入れてストレス解消してほしいと思った。</li> </ul>
山古志への思い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住民の人たちの団結力の強さ（集団移転）。住民の人たちの山古志への思い</li> <li>・住民の人たちの団結力の強さ。復旧や復興の違い</li> <li>・一人一人が復興に向けて、自分ができることを頑張っている。山古志への</li> <li>・山古志村の一人一人が「1日でも早く戻りたい」と思っていて、村に戻った後も、とう牛や錦ゴイなどをまた再開できたので、この人達は本当に山古志村を再生したいという熱意が伝わってきた。</li> <li>・山古志村にみんなで戻って、家を震災前と同じ場所に建てたことがすごいと思っ</li> <li>・山古志の人は自分の村を大切にしている、山古志に帰りたいという思いを感じ</li> </ul>
伝統	<ul style="list-style-type: none"> <li>・山古志の文化や伝統について</li> </ul>

図表 2 8 山古志の集落の復興で、南三陸町や戸倉地区の復興に  
活かそうなアイデア

伝統・行事	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 伝統を残す</li> <li>・ 地域などの行事等をやる。</li> <li>・ 地域の祭りなどを再開させる。様々な相談ができる窓口とかを設置する</li> <li>・ 復興公営住宅。地域の文化や伝統を守る</li> <li>・ 夏祭りを再開させる。（お話の中で祭りを再開させるとかいったから）。これから復興にたずさわっていく若い連中をもっと増やす。</li> </ul>
すすめ方・姿勢	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 早く復興を計画していた。あまり村を変えないようにしていた。自然と共存共栄していた。交流の機会を増していた。自分たちにキャッチフレーズを持ち、それを達成できるように力をそそいでいた</li> <li>・ 直売所などを作ったと言っていたので、戸倉にも取り入れたい。山古志の復興にはたくさんの目標があったので、戸倉にも復興と復旧に向けての小さい目標を立ててほしい。</li> <li>・ 復興に大切な事は、住民に希望を持たせる事。そのためにも、期限をはっきりさせるという事。</li> <li>・ 公営住宅を作る。ほかの地区や集落の協力、特産品の直売所</li> </ul>
自然	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ あまり村を変えないようにしていた。自然と共存共栄していた。交流の機会を増していた。</li> </ul>
直売所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域などの行事等をやる。直売所を増やす。地震前よりも住みやすく</li> <li>・ 直売所などを作ったと言っていたので、戸倉にも取り入れたい。山古志の復興にはたくさんの目標があったので、戸倉にも復興と復旧に向けての小さい目標を立ててほしい。</li> <li>・ 公営住宅を作る。ほかの地区や集落の協力、特産品の直売所</li> </ul>
住みやすさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域などの行事等をやる。直売所を増やす。地震前よりも住みやすく</li> <li>・ 地域の祭りなどを再開させる。様々な相談ができる窓口とかを設置する</li> <li>・ やはり、お金をかけないで、どれだけ質がよく、住み心地がいい家を建てるのが重要かということがアイデアとして使えると思う。</li> </ul>
公営住宅	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 復興公営住宅。地域の文化や伝統を守る</li> <li>・ 公営住宅を作る。ほかの地区や集落の協力、特産品の直売所</li> </ul>
お金	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ やはり、お金をかけないで、どれだけ質がよく、住み心地がいい家を建てるのが重要かということがアイデアとして使えると思う。</li> </ul>

図表 2 9 高齢者や障害者などが、安心して住めるような復興まちづくり

人の交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高齢者が集まる場所とかをつくる。さみしくないようにする</li> <li>・ 集落をこのままにする。</li> <li>・ お茶会とかを開く</li> <li>・ 周りの人達が協力しあって高齢者を支える。</li> <li>・ おなやみ相談室をつくる</li> <li>・ 週に何回か係りの人が家を訪問</li> <li>・ 家の近くの人とかとのコミュニケーションを大切にする。</li> <li>・ 地域の人と交流できる場所</li> </ul>
バリアフリー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ バリアフリーにする。歩きやすい道路の整備</li> <li>・ バリアフリーをなるべく多くの場所に設置する。</li> <li>・ 点字ブロックをおく。車イス用のスロープをおく。</li> <li>・ 高齢者や障害者などが安心して過ごすには、バリアフリーにすることが必要だし、使いやすくシンプルなまちづくりが必要だと思う。</li> </ul>
災害対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ バリアフリーの住宅にしたり、公園を作ったり、もし大きな津波がきた際にも、頑丈な建物の中の「津波シェルター」を多く用意する（前に朝ズバでやった）</li> </ul>
公園・病院・学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 近くに病院をつくる。老人ホームなどをつくる。高齢者や障害者だけにせず、若い人たちも近くに住む。</li> </ul>
町全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高齢者や障害者などが安心して過ごすには、バリアフリーにすることが必要だし、使いやすくシンプルなまちづくりが必要だと思う。</li> </ul>

図表 3 0 若い世代や子育て世帯が、安心して楽しく暮らせるまちづくり

公園・娯楽施設	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公園、娯楽施設などを建てる。運動場も建てる</li> <li>・安全な公園。娯楽施設をつくる</li> <li>・被災した所に、緑あふれる公園を作る。</li> <li>・若い世代の雇用をうみ出すために、大型のショッピングセンターを作ったり、小さい子供が遊べる公園などを作ったりする。</li> </ul>
店舗	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病院とかお店とか便利なものをつくる。前よりもみ力のあるまちをつくる。</li> <li>・近い所に学校や店を作り、いつでも行けるようにする。</li> <li>・公園、お店を増やす</li> <li>・若い世代の雇用をうみ出すために、大型のショッピングセンターを作ったり、小さい子供が遊べる公園などを作ったりする。</li> </ul>
病院・学校・保育施設	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病院とかお店とか便利なものをつくる。前よりもみ力のあるまちをつくる。</li> <li>・近い所に学校や店を作り、いつでも行けるようにする。</li> <li>・公園や子供を預ける場所などを設置する。</li> <li>・親が働いている時に子供をあずけることのできる施設をつくる。</li> <li>・働く場所、学校の再開、病院の設置。外で遊ぶところ</li> </ul>
町全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病院とかお店とか便利なものをつくる。前よりもみ力のあるまちをつくる。</li> <li>・若い世代が住みたくするような町並を作る。</li> </ul>
災害対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・（上のを参考）「上の」→バリアフリーの住宅にしたり、公園を作ったり、もし大きな津波がきた際にも、頑丈な建物の中の「津波シェルター」を多く用意する（前に朝ズバでやってた）。それにつけ足して、被災した所に、緑あふれる公園を作る。</li> </ul>
雇用対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・働く場所、学校の再開、病院の設置。外で遊ぶところ</li> <li>・若い世代の雇用をうみ出すために、大型のショッピングセンターを作ったり、小さい子供が遊べる公園などを作ったりする。</li> </ul>

図表 3 1 地震の後、集落や地区を離れた人々と、もとの土地や人間関係のつながりについて

感じたこと、考えたこと

土地	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不便な所に戻った人がいっぱいいて、山古志が好きなんだなーと思った。</li> <li>・やはり自分達の集落に戻りたいと思った人が多かったと思った。地域のつながりが強い</li> <li>・集落や地区を離れた人達も、もとの土地を忘れず、人間関係を大切にしていけるべき。</li> <li>・決まった日に離れた人々ももとの土地に集まって、土地の整備などに努める。たまにお茶する</li> <li>・時間がある時に行く。地域の人に会いに行く。年に一回程度みんなで集まる。</li> <li>・こっちはほとんどが災害の前の所に住んで、また、ご近所づきあいもいい。若者やお年寄りにも発言力があるから。</li> <li>・集落や地区を離れた人々は、仕方がないと思いつつも、後悔はあったと思うし、もとの土地や人間関係も崩れてしまった場所や孤立してしまったところもあったと思う</li> </ul>
人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人口が減少してしまった。さびしくなってしまったが、自分達の町の伝統の文化をさいかいしたことでもともと地域の仲が深まったと思う。</li> <li>・やはり自分達の集落に戻りたいと思った人が多かったと思った。地域のつながり</li> <li>・みんなで集まる回数が減った</li> <li>・集落や地区を離れた人達も、もとの土地を忘れず、人間関係を大切にしていけるべき</li> <li>・遊ぶ回数が減った。</li> <li>・決まった日に離れた人々ももとの土地に集まって、土地の整備などに努める。たまにお茶する</li> <li>・今まで普通に暮らしていた「日常」というものの大切さがしみじみと感じられてくるし、時々被災地で被災していないところを見ていくと、「家に帰れるかな？」と思うときがある。（実際にはないのですが…）。自分の集落は人と人との絆が強かったような気がする。</li> <li>・時間がある時に行く。地域の人に会いに行く。年に一回程度みんなで集まる。</li> <li>・こっちはほとんどが災害の前の所に住んで、また、ご近所づきあいもいい。若者やお年寄りにも発言力があるから。</li> <li>・集落や地区を離れた人々は、仕方がないと思いつつも、後悔はあったと思うし、もとの土地や人間関係も崩れてしまった場所や孤立してしまったところもあったと思う。</li> </ul>
生活	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今まで普通に暮らしていた「日常」というものの大切さがしみじみと感じられてくるし、時々被災地で被災していないところを見ていくと、「家に帰れるかな？」と思うときがある。（実際にはないのですが…）。自分の集落は人と人との絆が強かったような気がする。</li> </ul>

図表 3 2 その他、山古志で見たことや感じたこと

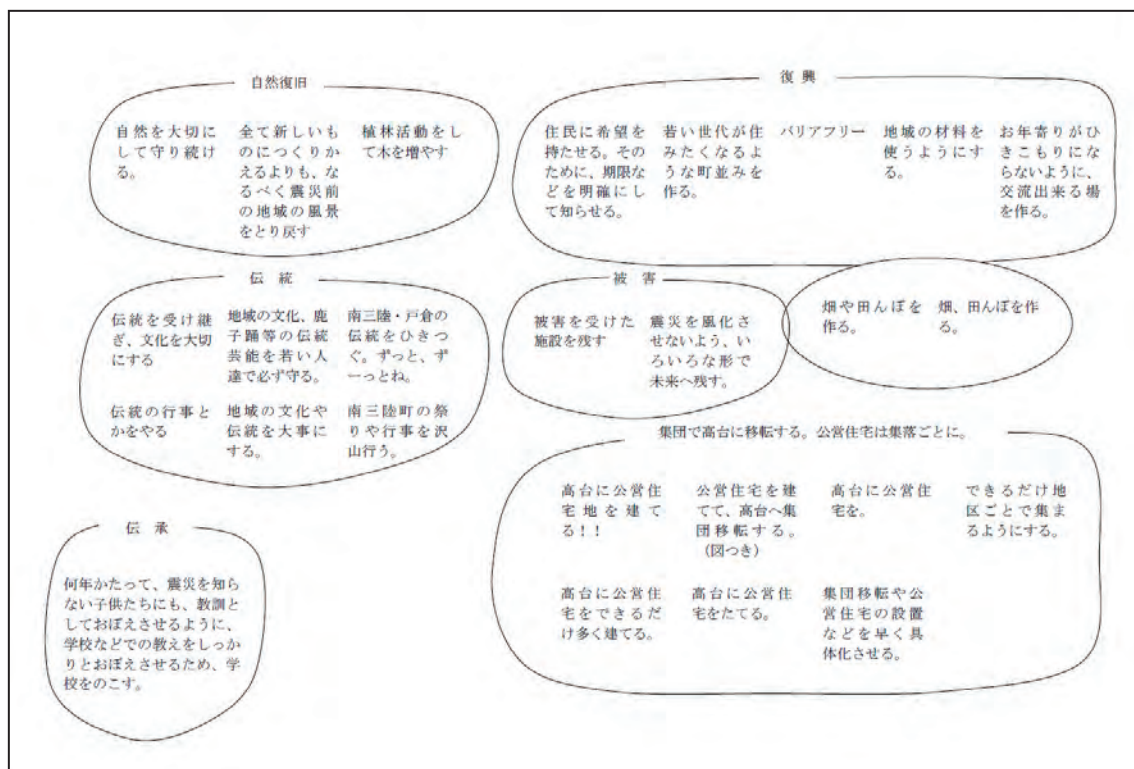
<p>復興の考え方</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一生けんめいがんばっていてすごかった。山古志とか住んでる人のことも考えながらやっていてすごいな—と思った。</li> <li>・新しく作るだけじゃだめなこと。伝統や文化を再開して地域の仲を深めていた。</li> <li>・むやみに復興をしてはいけないこと。それが本当にしていいことかを良く考える大切さを学びました。</li> <li>・7年で、なにもないように感じた。震災の大きさやきぼはちがうけど、時間をかけよりよく再生していきたい。</li> </ul>
<p>雪・自然 と、家・町・人</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・雪が多い。家が特別な形。</li> <li>・雪が多すぎる、でも道路に雪は全くなかった。1階部分が本当に倉庫みたいになっていた。</li> <li>・雪が多かった。雪への対応のしかたがすごかった。</li> <li>・住民が山古志に戻ろうと、団結して、あきらめずに頑張った話を聞いて、すごい—と思った。復興した町も、前はあんなふうには災していたとは思えないほど、きれいでおどろいた。山古志の人達はみんなとても優しく、すごく楽しい一日を過ごすことができて良かった。良い思い出を作ることができた。雪合戦が楽しかった。</li> <li>・雪への対応がすごい。</li> <li>・雪が水っぽくて、雪玉が作りやすかった。山脈が東北の山とは全然違って、きれいだった。積雪がすごい。ひとめぼれのほうがおいしかった。道が全部同じ。道路にお湯が出てくる装置があった。</li> <li>・今考えると、この山古志村と同じ震度7でもうちの地域は、地震が起きても家の被害が全然なかったりしいので、こちらは地盤が弱かったのではないかと思います。(まあ土砂崩れが多い場所だったらしいし…)。民家の屋根にすごい量の雪がつもっていて、危ない—と思った。</li> <li>・雪の質が違う。見ただけでは震災が起こったところとは思えないような所だった。</li> <li>・雪が戸倉と比べて段違いで多かったし、道路も復興され、新しかった。</li> </ul>
<p>その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アルパカがかわいかった。ムーミン谷がいろんな意味ですごかった</li> <li>・ムーミン谷→天空の里。アルパカがカワイイ—と思った。</li> <li>・スペインかぶれのとう牛。びっくりした。ムーミン谷や天空の郷など、なんかアニメに影響されてる—と思った。</li> <li>・アルパカは牛舎の臭い。かわいかった。</li> </ul>

⑥中越から自分達のまちの復興を考えるワークショップ

元長岡市職員で山古志支所にて山古志の復興まちづくりに尽力された齊藤さんにお話を聞きいたり、中越地震発生時からボランティアとして、全村避難した山古志村民の支援を行ってきた現復興支援員の井上さんの話を聞いた。

そのあと、小規模住宅地区改良事業で実際に高台に住居を移した楯木集落を視察したり、木造長屋形式の復興公営住宅や中山間モデル住宅（自力再建世帯に対して、山古志に合った住宅を提案しているモデルハウス）を見学した。その後、①中越の復興で大切だと思うこと、印象に残ることについて意見を出し合い（図表29、31）、それらをもとに、復興地図に書き込みを行っていった。

このように、他の地域をみることの効果として、「自分達の地域について気づいたり、客観視できるようになる」ことがあげられる。また、復興地図にまとめられたアイデアの変化をみると（図表30、32）、はじめは「〇〇が建ってほしい」といった行政などへの要望が多かったが、回を重ねるごとに、より主体的な関わりを模索するような内容のものが増えたり、地域の産業など広く意見が集まるようになった。今回は、こちらから「町の復興はこうあるべき」といったことは言わず、あくまでも他の事例などを情報提供することのみにし、生徒さんの内発的な議論を大切にしたい。



図表 3 3 中越地震の被災地をみて大切だと思ったこと（1班）

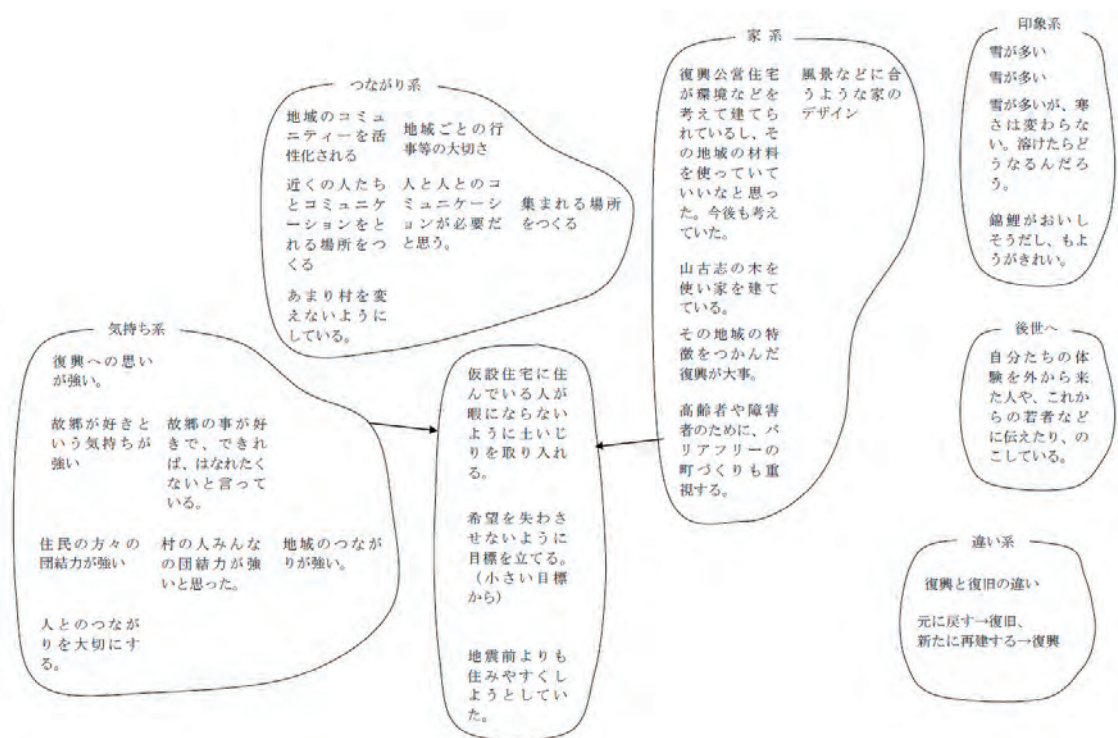


図表 3 4 南三陸町の復興まちづくり (1班)

戸倉地区の復興まちづくり検討1 秋全校ワークショップ（2班：震災後も戸倉地区以外に住む生徒の班）

1班と同じく、2班も回を重ねるごとに、主体的な取り組みにつながる具体的なアイデアが増えてきた。また、2班は、現在も町内に住む世帯が集まったので、より感情や感覚に訴えるような意見が多いように感じられた。山古志の話聞き、実際に自分の目で見て感じることで、山古志と南三陸町の似たところ、違うところを整理しながら、実際に南三陸町でも活かせるアイデアをまとめていた。

被災地で、毎日精一杯忙しい日々を送っている中学生に、このように、短時間でも、自分の町を客観的にみつめる時間を持つような機会を、まわりが作っていくことは、とても大切なことであると思われる。



図表 3 5 中越地震の被災地をみて大切だと思つたこと（2班）





図表 3 6 南三陸町の復興まちづくり (2班)

#### 4-3. 中学校の総合学習プログラムとしての意義

本研究では、戸倉中学校でのプログラムの実施をふまえて、被災した中学校で総合学習の時間を利用して、復興まちづくりについて取り組む意義を3つ示す。

##### (1) 若い世代の復興まちづくりへの関心・参画を促す機会として

若い世代のまちづくりへの参加について、「地域に留まって、復興の力となる人材を」と決めつけず、高校卒業後に町外へでていく人が多い現実をふまえて、若い世代の将来の夢やビジョンと葛藤に寄り添いながら、「町の外から」「町の中から」復興にかかわれる方法を模索し、内発的なプロセスを大切にしながら議論することが大切である。そうすることによって、本音で熱い議論をすることができ、友達の意見を聞いてそれぞれの考えを深められるのではないか。

##### (2) 復興まちづくりを考えるためのイマジネーション力を掘り起こす機会として

秋に全校ワークショップを実施した際には、「〇〇が建ってほしい」といった、要望が多かったが、ワークショップを重ねるごとに、具体的な地域の魅力を育てつつ、現実的に若い世代が住みやすい町について、考えられるようになった。このように、学習とワーキングによる計画の変化のプロセスを大切にプログラムをすすめていくことが重要である。そのためには、外部者だけでプログラムをすすめたりせず、生徒にとって一番身近な担当教員との役割分担をして、率直な意見を発言しやすい場づくりが大切だと思われる。

また、今回の一連の授業から興味深いこととして、次のことがあげられる。町の復興像として、高校卒業後、町を出たい人は「いつまでもかわらない故郷像」を描き、町に残りたいと考える人は「若い世代が住みやすく集まってくるような、便利さ」を強く求める傾向がある。

##### (3) 他の事例を学び、自らの地域の復興を考える機会として

新潟県中越地震の集落移転や復興プロセスに関する学習とその効果としては、他の地域を実際に見ることで、自分の地域の特徴や大切なことに気づくこと、具体的な復興の道のりを知ることの大切さをあらためて知らされた。被災地の他の中学校でも、このようなプログラムを実施していくことが、重要である。地域の復興に役立つということだけでなく、被災した若い世代に、具体的に復興のイメージや希望が湧いてくるという機会に少しでもなるのであれば、意味のあることであると思われる。

#### 4-4. 小括

第四章では、実践研究を行った宮城県南三陸町の戸倉中学校（校舎が被災し隣接する市町村の廃校を利用して授業を継続）での活動について記録、分析した。

戸倉中学校では、被災した地域から離れた地の校舎で毎日の学習を継続し、震災後は町外に居住する生徒が多いので、逆に、学校側が、生徒達に対して、自らの町の現状を伝え、地域の復興を考える機会を持ちたいと考えていたことから、震災半年後から、復興まちづくりに関する総合学習の授業を本研究で担当することとなった。

当初の計画では、本研究の目的として、若い世代が自らの町の復興に関心を持ち、まちづくりの提案をすることによって、「人口流出をとめる」「若い世代が主体性を持ってまちの復興に寄与する」ためのプログラムの構築を目指そうと考えた。しかし、現実には、そのような、やや短絡的で単純なものではなく、若い世代の各人の将来のビジョンを考えるなかで、「生まれ育った地域の外に暮らしたとしても、自らの故郷の復興に向けて出来ることは何か」を具体化していくことが重要と考えられた。

「町内に住む」「町外に住む」という区別は、行政の市町村の範囲内で人の移動を考えているからである。もちろん、町内、地域内に留まって復興まちづくりに参画する人材を育てることも重要だ。しかし、それに加えて、実際には、車を利用した生活圏での移転や、若い世代が羽ばたいていく大都市圏への移転など、被災地全体として、若い世代の復興まちづくりへの関心を高め、地域とのつながりを持って生きていくことを考えていくことも、積極的に検討していくことが、より実態に近く、効果的、建設的ではないかとの結論に達した。

実際のプログラムでは、第一回目は、過去の災害の復興の事例などの学習をしないで、町の復興について、生徒が素直に思ったとおりの議論をすることにした。回数を重ねていくなかで、事例学習や視察を通じて、生徒のグループワークの議論にどのような広がりがあるかを考察した。

実施してみると、まちの復興イメージについて、10年後も町に留まると答えた生徒が、「人々の深い絆や温かさはそのままが良いが、便利で若い世代が必要とする店舗などの商業施設等が必要」と考える傾向が強いのに対し、10年後には町を出ているだろうと答えた生徒は「震災前と変わらない、そのままのまちがいい」と答える傾向が強かった。

また、「地域にとどまることができること」「地域外からかかわれること」について、カードゲームを用いて議論を行った。結果として、若い世代には、「地域への愛着」と「地域から外にでて頑張りたい」という複雑な気持ちや、家族（親、兄弟）の自分への期待との葛藤があることが明らかになった。こういった、現実の、若い世代の考えを引き出しながら、柔軟に、復興への関わり方を自らで探っていくようなプログラムの構築が必要であると考えられる。また、新潟県中越地震の集落移転の視察や関係者との交流による復興プロセスに関する学習を通して、より、自らの町の復興に重要なテーマのイメージに広がりが出る効果があった。

### 【参考文献】

- ・南三陸町復興計画策定会議第五回資料 2012.2
- ・石川永子 「中山間地域を含む地方都市における段階的な住宅再建支援手法に関する研究 -小規模住宅地区改良事業内の公営住宅・自宅跡公営住宅の事例をもとに-」  
日本災害復興学会大会梗概集 2010
- ・楯木地区集落再生計画づくり懇談会 長岡市「楯木集落・天空の郷 新しい暮らしづくり計画」 2008.3
- ・長岡市「山古志地域集落再生計画の概要」2007.3
- ・矢守 克也 , 網代 剛, 吉川 肇子 「防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション  
ークロスロードへの招待」2005

## 5. 東日本大震災の復興過程における実践研究をもとにした考察

### 5-1. 2事例の考察まとめ（地域の事情に合わせた中長期的な展開に向けて）

3章と4章の実践を通して、全員参加の総合学習の授業のプログラムについて、その効果と実施の際の配慮点について検討してきた。プログラムは焦ってすすめるのではなく、生徒の方々が、まちづくり学習を通して、自分の将来について考えたり、具体的な見通しやイメージを持って前向きに進んでいけるようなきっかけとなることが、もっとも重要であると考え。そのためには、毎日近くで生徒に接している先生方と協議しながら、若い世代に負荷がかかりすぎないよう無理のない内容とすることが大切である。こういったことに配慮することで、遠まわりであるようだが、若い世代が復興まちづくりに参加する基礎づくりとなると思われる。なお、復興まちづくり学習で、若い世代が参加する際のと論点として、次の6つを指摘する。

#### 【若い世代の復興まちづくりの参加に関する論点】

- ① 世代の移動圏域と十代の移動圏域の違い
- ② 地域外に暮らす若い世代の地域との無理のない持続的なつながり、復興に関する活動への参加の仕組みづくり
- ③ 若い世代の、家族・土地への愛着と、自らの将来を考える間での葛藤について議論する機会づくり
- ④ 大人の理想像にとらわれない自由な発想を活かしつつ、事例や議論を重ねていくことで、議論が深まるプロセスデザイン
- ⑤ 復興の多様性を知ることの重要性
- ⑥ 復興の議論が「将来に向かって前にすすんでいく力になる」と広義の心のケアの効果

### 5-2. 広域災害における若い世代の復興への参加の可能性

特に集団移転を伴う復興計画や地域の具体のまちづくり計画やその実施の際の論点を図表34にまとめた。高台移転の論点や復興まちづくりの参加の仕方、求めるまちづくり像の傾向などは、大人の論点とは異なるところも多かった。また、商業施設の誘致など、地域の状況などをふまえ、理想だけでなく現実的な考えを持っていることや、町外へ転出しても町の復興に参加する方法を模索していること、災害や被災経験の伝承など、大人は議論しづらい雰囲気である内容についても、前向きに議論する傾向にあるなど、特筆すべき点をまとめることができた。もっとも、これらの点は地域により変化があると考えられるので、今回のプログラムのようなことが、多くの地域で行われ、地域の計画策定に活かされていくことを期待したい。

図表 3 4 東日本大震災の復興まちづくりにおける論点（今回の議論から抽出）

	大人の論点	十代(中学生)の論点
移動圏域 人口減少	生活圏内(車)の内陸部へ移動(自治体境界を越える転居にこだわりが薄い傾向も)。 住宅再建時期の見通しが立たないと、サラリーマン子育て世代の転居が加速。	将来の夢の為、高校卒業後、町を出たい(行き先は未定だが都市部)割合は高い。年に何度か帰る。(実家は町内に再建を前提に話している?)
復興への 参加の機会	復興計画:比較的高齢の参加者が多い 住宅再建:世代にかかわらず説明会に参加 集落部話し合い:意思決定は財産区会員が中心(共有地)	参加方法は、町内で働く(消防士・町職員・エンジニア等)、復興の話し合い参加や、(特に町外から)ボランティア、地域行事参加など。参画のイメージがわからない人も。
地域への 愛着・つながり	集落部は親せきのつながり非常に強い 漁村部は集落ごとの独立性が強い 漁業や関連産業を通じた産業つながり	地域への愛着は強い。小中の同級生のつながり。地域芸能・地域行事(特に祭り)の継続・伝承への意欲。「地域を出た人も集まれる日をつくる」自分の将来と町への愛着への葛藤
高台移転の是非 論点	高台移転に関する反対はほとんどない(高台か内陸か?) 論点は①移転先の立地、②移転単位(集落ごと?統合?)③提供される土地面積・時期	集落の集約・商業施設は過度な期待がなく、現実的。高齢者を集落で見守る大切さ(公営住宅の立地等)を指摘。集落の近接地での移転の要望も。生まれ育ち集落を知る人が地域復興に参画する大切さを指摘。
求めるまちづくり の傾向	①市街地と集落 ②漁業・関連産業か会社員か ③公営住宅を希望するか で、住宅再建希望時期、まちづくりの優先度が異なる	まちを出たい人は、震災前と変わらない故郷、まちに残る人は、道路や施設など利便性や若い世代や子育て世代が暮らしやすい利便性を求める傾向がある。
メモリアル施設等	防災庁舎をはじめとして、議論しにくい雰囲気。辛い思い出忘れない	災害の伝承:比較的前向き。(町内の学校は未確認)

### 5-3. 小括

第五章では、第四章までの内容をもとに、東日本大震災の復興過程における若い世代の復興まちづくりへの参加手法のデザインについて考察した。

総合学習の授業は、全員参加であるため、被災地の学校では、プログラムに参加できるような心境ではない生徒さんがいることも想定される。また、巨大災害で復興計画を実行するための新しい制度や財源などの担保が見えてこない状況においては、市町村の復興計画や地域のまちづくりの具体的な検討が遅れることもある。よって、焦ってすすめるのではなく、毎日近くで生徒に接している先生方と協議しながら、若い世代に負荷がかかりすぎないよう無理のない内容とすることが大切である。本研究は1年間であるため、本研究の到達点である町に対する復興まちづくり提案を行い、検討結果を実際のまちづくりに活かすためのしくみづくりといったところまではいかなかった。今後は、町で行っている中学生の地域代表のミーティングや、学校のPTAなどの場から、今回の成果について発信していき、若い世代の本音や、若い世代が魅力的だと思えるまちづくりについて、実際の地域の復興まちづくりの計画に活かしていけるよう努力したい。

なお、今回の取組をとおして、復興まちづくりに関する授業に関する重要な論点として、次の6つを指摘しておく。①親世代の移動圏域と十代の移動圏域の違い、②地

域外に暮らす若い世代の地域との無理のない持続的なつながり、復興に関する活動への参加の仕組みづくり、③若い世代の、家族・土地への愛着と、自らの将来を考える間での葛藤について議論する機会づくり、④大人の理想像にとらわれない自由な発想を活かしつつ、事例や議論を重ねていくことで、議論が深まるプロセスデザイン、⑤復興の多様性を知ることの重要性、⑥復興の議論が「将来に向かって前にすすんでいく力になる」と広義の心のケアの効果がある。

## 6. 本研究の他地域への応用1（災害後の復興過程における展開）

### 6-1. 東日本大震災の他地域への応用の可能性

平成24年3月現在、被災市町村では、復興計画を受けて、地域ごとの復興事業の詳細について、地域住民と打合せをしながらすすめているところであるが、地域での話し合いは、地域の代表の役員など比較的高齢者が出席する傾向が強い。しかし、東日本大震災の復興には、長い年月がかかる可能性が高い。将来、地域を担う若い世代が復興について考えることは重要である。

### 6-2. 若い世代の復興まちづくり検討プログラムの構築に向けて

本研究の第3章、第4章で実施したプログラムをもとに、東日本大震災の他の被災地の中学校等の総合学習の授業で実施しやすいよう、今回のプログラムを簡易ガイドブックにすることを検討している。図表35がそのサンプルである。

被害や地域性、実施時期によって、「復興まちづくり版」に加えて、「被災から現在までをふりかえる版」「これからの将来を考える版」などが考えられる。これらのプログラムに地域性に合わせたオプションを検討できるようにするなど、可変性のあるものをつくり、教育現場や地域のニーズにあわせて、教員や支援者がアレンジする形が利用しやすいのではないかと考えられる。



図表35 復興まちづくり学習 簡易ガイドブック



### 6-3. 小括

第六章では、第五章までの内容をもとに、本研究の成果を他地域に活かすためのプログラムについて検討した。災害後の復興過程における展開のしかたについて検討し、南三陸町の実践研究を通して得た知見を、他地域や他災害に活かしていくことを試みた。

東日本大震災や、今後発生する災害後の復興過程における展開のしかたについて検討した。「復興まちづくり版」「被災から現在までをふりかえる版」「これからの将来を考える版」などの基本形に加えて、地域性に合わせたオプションのプログラムなど、可変性のあるものをつくり、教育現場や地域のニーズにあわせて、教員や支援者がアレンジする形が利用しやすいのではないかと考えられる。

また、神戸や中越などの災害対応の振り返りを行う防災ゲームや、復興プロセスにおける市民参画のさまざまな蓄積を活用することが、プログラムの充実につながると考えられる。特に、クロスロードゲームなど、復興に関する、なんとなく発言しにくい意見を、ロールプレイの手法を使っておこなうことで、なかなか面と向かって議論にくい話題であっても、向き合いやすくする効果がある。

## 7. 本研究の他地域への応用2（事前復興まちづくり活動への展開）

### 7-1. 事前復興まちづくり検討プログラムの現状

現在、東京都等で実施されている「事前復興まちづくり訓練」は、災害が起きても復興まちづくりの為に可能な限り地域に留まって乗り切れるよう、災害が起きる前に、地域の災害時の助け合いや、仮住まい、住宅再建を地域で考え、復興計画を考えておく力を育てる訓練を行うプログラムであり、行政職員用と市民用がある。ただし、市民用も実際の参加者は、自治会の役員など、高齢者が多く、より多様な世代が参加するための工夫が課題となっていた。また、想定される被害は、主に地震の揺れによるものであり、津波被害からの復興について考える実施事例は、非常に限られている。

下記の写真は、復興まちづくり模擬訓練を、災害時要援護者（災害時の避難行動や避難生活において、特に配慮や支援が必要な人）を地域でどのように助けていくのかを考える、自治会を対象とした、復興まちづくり模擬訓練要援護者版の様子である。



写真35 写真36 事前復興まちづくり訓練の様子  
（災害時要援護者版）東京都八王子市



写真37 公園の仮設住宅の配置模型 写真38 復興カレンダー

※今後は、地域性に合わせたオプションのプログラムなど、可変性のあるものも追加

し、教育現場や地域のニーズにあわせて、教員や支援者がアレンジできるようなプログラムになるよう、改善していく。

※被害が大きく、まだ、復興まちづくりを考えられる状況ではない

学校には、「被災から現在までをふりかえる版」「これからの将来を考える版」も考えられる。

## 7-2. 東南海・南海地震等の発生が予想される地域での事前復興プログラムへの応用の可能性

本研究の第3章、第4章で取り組んだ実践研究で重要となった下記の論点や、活発な議論ができた手法を、既存の事前復興まちづくり訓練に織り込む。

### (1) 津波災害からの復興版

現在、住民組織等で行われている、津波防災への取組みは、高台への避難行動を促すものがほとんどである。津波が押し寄せ引くまでの間、その後、物資が来るまでの間どのように過ごしたらよいか、地域でどんな備えが必要かについて、議論したのが、浜（2007）の徳島県における事前復興まちづくり訓練である。しかし、津波後の被災地をどのように復興させていくのか計画する検討までは至っていない。

今回、戸倉中の全校生徒ワークショップで行った「復興カレンダー」の議論をもとに、津波被害後の地域の復興について事前に地域で検討たり、現在の地域の津波被害に対する脆弱性をチェックして中長期的なまちづくりの方向性を考える減災まちづくりに活かすプログラムをつくることが可能である。

2012年に制定された、津波防災まちづくり法は、復興まちづくりだけでなく、今後津波被害が起こる可能性のある地域の減災まちづくりにも適用される。東海・東南海・南海地震の被害が想定される市町村で、このような取組みは有効であると考えられる。

### (2) 事前復興まちづくり 若い世代版

広域災害や過疎地域など、災害を契機に震災前に暮らしていた地域から転出する世帯も多い。また、このような地域は、十代の若者が高校卒業後に都市部に転出してしまいう傾向が強い。こういった地域で災害の発生が予測されている市町村で、若い世代に地域の将来について考えてもらうきっかけとして、災害後の復興まちづくり計画を考えてもらうプログラムを実施することが有効であると考えられる。災害後の復興を考えることは、20～30年後を見通した地域像を考えることにもなるので、地域の世代間の対話の機会としても意義があるのではないかと。

### 7-3. 小括

第七章では、第五章までの内容をもとに、本研究の成果を他地域に活かすためのプログラムについて検討した。事前復興まちづくり活動への展開について検討し、南三陸町の実践研究を通して得た知見を、他地域や他災害に活かしていくことを試みた。

現在、東京都等で実施されている「事前復興まちづくり訓練」は、災害が起きる前に、町の復興計画を考えておく力を育てる訓練を行うプログラムとなっており、行政職員用と市民用がある。ただし、市民用も実際の参加者は、自治会の役員など、高齢者が多く、より多様な世代が参加するための工夫が課題となっていた。

今回の実践研究で重要となった視点や、活発な議論ができた手法を、既存の事前復興まちづくり訓練に織り込みながら、若い世代が参加するプログラムに再構築することが重要である。これからを担う若い世代の意見には、多くの町の人も刺激をうけ、まちづくり訓練の議論も活性化されることが予想される。また、東日本大震災の被災市町村と、同じく広域津波被害が予想される東南海・南海地震の被災市町村では、似た環境や被害の予想される市町村があるので、今後は、津波防災まちづくり法により、減災としての事前まちづくりの検討を考える市町村も増加すると考えられるので、実際の取組みに活かせるように、プログラムの構築や実践につなげていきたいと考えている。

#### 【参考文献】

浜大吾郎，市古太郎，河上牧子，照本清峰，村上大和，石川永子，中林一樹「津波復興まちづくり模擬訓練の手法開発と課題－徳島県美波町での事例を通して－」地域安全学会梗概集 No, 20, 2007

Eiko ISHIKAWA, Itsuki NAKABAYASHI, Taro ICHIKO, Jin YOSHIKAWA, "Community Training Program for Community Based Support Systems for People in Need of Help under Disaster Conditions and Reconstruction" International Recovery Platform 2010, 1

石川永子，松本亜沙香，河村咲弥，立木茂雄「東日本大震災における災害時要援護者への対応について－仙台市の対応を中心として－」地域安全学会論文集, 2011, 5